



始







特104
55

持104
55



みさき
し



青木緑園著

大正
5. 4. 11
内交



世には通俗的な面白い小説もあれば、また純文藝式な高級の作物もあるが、本書の如きは實に此の兩方面を兼ねたもので、家庭の讀物としては是れに及ぶものなしと自家廣告をして置く。

作者

はしがき

五六
11.4.8
交内







小みどり

一根岸の家

青木緑園著

菊枯れて天寒く、秋景はやく移りて、芝蘭の先づ敗るゝを傷む頃である。下谷は中根岸の、お行の松の片ほとり、黒板塀を圍らした門構への小やかな住居があつた。未だ越して来てから間が無いのであらうか、新しい朴の木の標札には、墨黒々と達筆に「梅村香雨」と記してある。

其の門の前に、今一輛の俵が止まつて、六十近い老人が下りたが、格子戸をガラ

リと開けて、

「御免！」

皺枯れた聲で案内を求めた。

家の中から柔しく、

「はい。」

と、聲がして、玄關の障子を開けたのは、二十一二のハイカラに髪を結つた美しい女で、老人の顔を見ると、

「アラッ、阿父様？」

女は、さも驚いた様に斯う云つたが、顔には不安の色が見えて、急いで内へ這入つたのである。

老人は満面に怒氣を含んで、物をも云はず、其の後に續いて上つて見ると、女は二十五六の男と一緒に、戸惑ひでもした様に六疊の間を迂路々々して居た。

それを見た老人は、女を睨まへ、

「文ッ！」

と、聲を張り上げて呼んだ。

「はい。」

「其處へ座れ、不都合な奴ぢや。」

女は文子と云つて、此の老人の娘なのであつた。

文子は、鳥渡男と顔を見合せると、云ひ合せた様に兩人は一緒に座つて、頭を垂れて居た。

文子の座つた傍には、生れてから百日位も経つたと思はれる嬰兒が寝かしてあつた。

老人は、ちつと其の嬰兒を覗て居たが、聽て、

「文ッ！ 貴様は何と云ふ情ない奴ぢや、俺はな、貴様に恚廢事を爲せやうと思つ

て東京へ出しはせんのおちや、其處に寝て居る兒は什麼したのおちや、ウム、貴様と、此の男の間に出来た子供ぢやらう、貴様が恣意事をして呉れたばかりに、俺は町の人達に顔向けが出来んのおちや。」

「何とも申譯が御座いません………」

と、文子は其處へ泣き伏した。

老人は改まつて男に向ひ、

「お前さんが、香雨と云ふ書家ぢやね。」

此の時まで頭垂れて居た男は、始めて口を開いて、

「左様で御座います、突然のお越しで、氣が轉倒して居りましたので、申し遅れて済みませんでした。」

「さうでしたか、始めてお目に掛りますぢや、よく不束な娘を可愛がつて下さつた、俺から厚く禮を云ひます。」

斯う皮肉に云はれて、香雨は穴でもあつたら這入り度いやうな氣がした。「此の度の事は、實に済みません次第で、何卒お赦しを願ひ度いので………」と、顔を眞紅にして謝罪したのである。

二都の風

老人は名を坂上昇と云ひ、後備の海軍大佐である。

家は静岡にあつて、長男の廣が裁判官をして居るので、昇は楽しく老後を送つて居た。

文子は昇の長女で、静岡の女學校を卒業すると、是非東京の學校へ入學たいと云ふのであつた、一時は拒んで見たものゝ、子に甘いのは親の常である、遂に其の要求を容れて、女子大學へ入學させたのである。

文子は始めの中こそ、一生懸命に勉強して居たが、都の風が染み込むに連れて綺

麗な服装がしたくなつて、何だ乎と口實を設け家から金を取り寄せては、飾身す事に腐心するやうになつた。

そればかりでなく、文子は何時の間にか、近所に居る青年洋畫家の梅村香雨と、道ならぬ誼らひをして妊娠の身となつたのである。

文子も香雨も今更ながら當惑して、此の上は一日も早く結婚しやうと思つたが、昇は至つて物堅い人で、殊に畫家は生來嫌ひであるから、文子は父に話しても到底承諾はして呉れまいと思つたので、香雨を説いて中根岸へ一戸を構へ、表面夫婦のやうに見せかけて暮す事にした。

其の後、文子は月満ちて女の兒を分娩したので、馨と名を付け、貧しい生活を續けて居たが、悪事千里のたとへ、恣廢事が何時迄も知れないで居る筈はない。郷里では、此の事を風の消息に聞いて、昇の驚きは一方でなかつた。

文子に限つて那廢事はあるまいが、兎に角様子を見る事に仕様と、急に上京して

香雨の家を尋ねる事になつたのである。

まさかと思つた文子が、風説に違はない有様を見た昇の腹の中は、掻き撈られる様な感じがした。武士氣質の昇の事であるから、

「憎い奴、其の分にして置くものか。」

と、思つたものゝ、制裁を加へた處で、今更文子が、元の通り清い身體になる譯ではない。此の上は、文子を連れて歸國るより詮方がないと、深く決心したのであつた。

三 悲しき別れ

昇は、心を落着けて静かに口を開いた。

「文ッ！ お前は東京へ置く譯に可かないから、これから直ぐ俺と一緒に静岡へ歸るのぢやぞ。」

「阿父様！ お腹立は御尤ですが、斯うして子供まで出来たのですから、何卒梅村と結婚をお許し下さいまし。」

文子が斯う云つて泣きながら頼むと、香雨も其の尾に付いて、

「今迄の事は只管お詫を致します。何卒此の兒を哀れと思召して、兩人の結婚をお許し下さいませ様、私からも願ひ致します。」

と、頭を疊に摺り付けて頼んだ。

昇は、眼を光らせて聞いて居たが、

「不可よ、許す事は出来んのぢや、文一 さア俺と一緒に歸れ。」

と、云ひながら立ち上つて、はや文子の手を取つた。

「何卒阿父様、さう仰有らないで是非……。」

「駄目ぢや、諍いッ！」

「それが不可ませんでしたら、此の子供を連れて行く事だけはお許しを願ひます。」

「子供なんぞ連れて郷里へ歸れるか、此處へ置いて行けば可いのぢや。」

「だつて阿父様、生れて間もない嬰兒ですから、男の手で育てるのは無理で御座います。」

「無理でも詮方がない、自分から招いた罪ぢや、子供の事なぞ心配しないで、此の男に委せて置け。」

と、昇は厭がる文子を引摺る様にして、門口迄出たのである。香雨は無言の儘送り出した。

「阿父様、那麼になさらないでも妾歸ります。歸る事は歸りますけど、此の服装では餘りですから、着物を着替へる間待つて下さい。」

「着物は夫れで結構ぢや。」

「着物を着替へる事さへ、お許しが無いのですか。阿父様、夫れは餘りです、餘りで御座います。」

と、文子は泣くのであつた。

「墮落の軀に、飾りは要らないのぢや、さア早く行かんか。」

と、昇は急ぎ立てるので、文子も漸く決心して、涙の目で香雨を見遣り、

「それではね、妾歸國ります。何卒妾の心中を、お察し下さい……………そしてね、馨をお頼みしましてよ。」

香雨は、唯だ頷くのみであつた。

「何を愚圖々々して居るのぢや。」

と、昇は、又急ぎ立てた。

此の時馨は目を醒まして、突然烈しく泣き出した。

「アラー！ 馨が……………」

と、文子は、身を切られる様な思ひをして、奥へ行かうとしたが、

「放棄つて置け。」

と、昇は邪慳に引き止めた。

香雨は急いで奥へ飛んで行つて、馨を抱き上げ、慰しながら再び入口へ出て来た時には、もう兩人の姿は見えなかつた。

馨は母に別れるのを悲しむのか、一層聲を張り上げて頻りに泣くのである。

「困つたなア。」

と、香雨は馨を抱いた儘、途方に暮れて居た。

四形見の櫛

馨の泣き聲が餘り烈しいので、それを聞き付けて、隣家の、煙草や駄菓子を買つて来るお辰と云ふ婆さんが、

「馨ちゃん、何を那麼に泣くの？」

と、裏口から這入つて来て、香雨が不格好に馨を抱いて居るのを見て、

「オヤツ、奥さんはお不在なんですか、那麽窮屈な抱き方ぢや、馨ちゃんが可哀相ですよ。どれ、妾にお貸しなさい……………」

と、香雨の手から、馨を受け取り、

「お、可愛い兒、可愛い兒、何を那麽に泣くの。」

と、頻りに慰したが、馨の泣きは止まなかつた。

「梅村さん、一體什麼したんですの。」

「小母さん、僕弱つちやつたよ文子がね、急に郷里へ歸國つ了つたのさ。」

「奥さんが……………？　まア……………馨ちゃんを置いてき堀にして……………御夫婦喧嘩でもなさつたんですか。」

「何ね、少し理由があつて……………郷里から親爺が迎えに来てね、今急に立つたのです。」

「だつて、恁麼、乳呑兒を置いてくなんて、餘り酷いわね、什麼してトす？」

「ナアニ、其の、何なんだがね……………。什麼でせう。何處かに預かつて呉れる家は無いでせうか。」

香雨の明瞭しない返事で、何か紛擾が起つたのだと察したお辰は、

「そうですわね。」

と、頸を傾けたが、應て、

「無い事も無いんですが……………幾らかお金を遣りませんかとねえ。」

「それは無論の事です。どのくらい遣つたら可いでせう？」

「子供も却々手の掛かるものですから、十圓位は遣りませんかとね。」

「月にですか。」

「さうですよ。」

香雨は、普通どのくらいで子供を預かつて呉れるものか知らないが、金額の多少を云つて居る場合でないから、

「それでは小母さん！ 濟みませんが頼んで下さい。」
と、五圓紙幣二枚をお辰に渡して、馨の養育の事を頼んだのである。

お辰は金を見ると莞爾して、

「妾のね心安い家で、女の兒なら預かつてても可いと云つて居ましたから、是から其處へ行つて頼んで見ませう、オヤマア馨ちゃんは泣き寝入りで寝て了ひましたよ。」
「さうですか、丁度幸いです、それぢや小母さん、何卒お願いします。そしてね念の爲めに是を持つて行つて下さい。」

と、香雨は書齋へ這入つて、巻紙へ走り書に「梅村馨、生後百五日」と認めて渡した。
お辰は夫れを受け取りながら、

「よ御座んすとも、行つて參りますよ。大變曇つて來ましたね、雪でも降らなければ可いが……。」

と、馨を抱いて出て行つた。

香雨は流石に馨の身の上を案じて、心配相な顔付で見送つて居た。

「あア既う日が暮れるのか、今夜は淋しいな。」

と、獨言を云ひながら、居間へ這入ると、力なく火鉢の前に座つて、不圖、先刻まで文子の座つて居た座蒲團に目を移すと、其處に文子の櫛が落ちて居た。

香雨は手を延して、其の櫛を拾ひ、つくづくと見詰めて居たが、懐しさうに、

「文子は、何の邊まで行つたか知ら……。」

と、云ひながら、何事か深い考へに沈んで了つた。

五雪の夜

お辰は、外見こそ猫撫で聲の優しい婆さんだが、腹の中は至つて良くない、強慾非道な悪婆である。唯だ金が欲しいばかりに、香雨から馨を引取つたものゝ、預ける處は無いのであつた。

凍つた風が身を切る様に寒い一月の事で、曇つて居た空は夕方から雪となつた。
お辰は、馨を抱いて家へ歸ると、身仕度もそこくに、左の手に襦袢を抱へ、右の
手に蛇の目の傘を持つて、

「酷い雪になつて来た。」

と、云ひながら、何處へか出て行つた。

躑躅の七時頃になると、上野公園の西郷隆盛の銅像の傍を迂路付いて居る老婆
があつたが、それはお辰である。

お辰は此處へ、馨を棄てに來たのだ。暫くの間、周囲の様子を見て居たが、丁度
人足の絶えたのを幸ひ、馨をそつと銅像の下へ置いて、急いで此處を立去つた。

馨は雪が顔へ掛るので目を醒したのであらう。絶え入る様に泣き出したのである。
普通の家の子供なら、今頃は母の懷中に暖かく眠る事が出来るのに、道ならぬ事
をした親の因果は罪も無い馨に報ひ、生れて間も無く、もう恚慮苦みを受けるので

あつた。

折柄、此處を通り合せたのは、内務省の属官の内村忠直夫妻である。坂本二丁目
の親戚を訪れての歸り途であつた。

「大層子供が泣いてるぢやないか。」

と、忠直が妻の爲子に云つたので、

「左様で御座いますね、什麼したのでせう。」

と、爲子は周囲を見廻した。

「銅像の傍で泣いてる様だが、まさか棄兒ぢやあるまいね。」

「こんな寒い雪の晩に、棄てる親も無いだらうと思ひますがね。妾鳥渡見て参りま
せう。」

と、爲子は泣く聲を便りに、銅像の傍へ行つたかと思ふと、大きな聲で、

「貴郎、棄兒で御座いますよ。」

「矢ッ張り棄兒だつたね。」

と、忠直は急ぎ足で其の傍へ歩みを進めた。

「寒いだらうね。可愛相に……………」

と、爲子は馨を拾ひ上げ、

「お、可し可し、泣くんぢやないよ。」

と、慰しながら、其の顔を見て、

「貴郎、可い兒ですよ、こんな可愛い兒を什麼して棄てたのでせう、鬼の様な人で
すこと。」

「何か着けてある品は無いか。」

と、忠直は馨の顔を覗き込んで云ふと、爲子は、

「さうですね。」

と、云ひながら、馨の懐中から端紙へ何か書いた物を探し出して、

「こんな物がありますよ。」

と、忠直の手へ渡した。

六 夫婦の情

忠直は、爲子から書付を受け取つて、瓦斯の光りで読んで見ると、「梅村馨、生後
百五日」と認めてある。

爲子は其の書付を覗くやうにして、

「何と書いて御座います。」

「梅村馨、生後百五日とあるばかりだ。」

「馨と云ふ名なんですね。良い名ですこと。」

「……………」

「妾はね、夫婦の間に兒の無いのを哀れんで、神様が此の兒を授けて下さつた様に

思はれますの、妾此の兒を拾つて、育てたいと思ひますが、如何で御座いませう。」
「さうだね、お前は既う四十近いんだし、俺も五十になるのは間も無い事だ。もう子供は出来や仕無いだらうから、さう云ふ事にするかね。」

夫婦は相談をして馨を連れ、池の端茅町の我が家へ歸つたのである。
女中のお元は玄關へ出迎へ、

「お歸り遊ばせ。」

と、挨拶して不圖見ると、爲子が可愛いらしい嬰兒を抱いて居るので、

「まア、お可愛らしいこと、何處のお子様で在らつしやいます。」

「妾の子だよ。」

と、爲子が莞爾しながら云ふと、お元は、

「アラ、奥様御冗談を……おほ、ほ、ほ。」

と、顔の大きい割合に小さな目を、一層細くして愛嬌笑ひをした。

忠直夫婦が居間へ通ると、爲子はお元を呼んで、

「着物を着替へる間、お前此の兒を抱いて居てお呉れ。」

「ハイ。」

と、お元は、爲子から馨を受け取り、

「まア、可愛いお顔をして在らつしやいますこと、奥様、眞箇に何處の御子様で在らつしやいます。」

爲子は笑ひながら、

「妾の子だと云ふのに、分らないお元だね。」

「ですけれど奥様に、急に怎麼お子様がお出来になる筈が御座いませんもの。」
「處が今夜出来たんだ。あまり急なので俺も驚いたよ、は、は、は、は。」
と、忠直は、斯う云つて大きく笑つた。

「アラ、旦那様迄が御冗談を……。」

「真個なんだよ、實はね妾に子が無いものだからね、今日親類から此の子を貰つて来たのだよ。」

爲子は、馨の將來を思つて、棄兒を拾つて来たと言ふ事は話さないであつた。

七 學 び の 庭

これまで夫婦と女中の三人暮して、火の消えた様に淋しかった内村の家では、
が殖えてから急に賑かになつた。

爲子は馨の着替へを仕度たり、襦袢を縫つたり、丁度お盆と節季が一緒に来たやうに忙しいのである。

歳月は夢のやうに、過ぎ去り過ぎ來つて、馨は早くも七歳の春を迎へ、花のやうに美しくなつて、此の四月から小學校へ通學する事になつた。

忠直夫妻の喜びは一方でない。早く年頃にして、良い婿を貰つて遣り度いと、今

から云ひ暮すのであつた。

或日のこと、馨は目を圓くして學校から歸つて來て、只今とも云はず突然に、

「阿母様？」

と、焦しく呼んだ。

「何ですね。お前何故只今と云はないのです。」

と、云はれて馨は急に、

「只今。」

と、頭を下げたが直ぐに

「阿母様。」

と、また呼ぶのであつた。

「何ですよ。そはくして……。」

と、云ひながら、爲子は顔を覗いたが、何時にない馨の素振りに不審を抱いたので

ある。

「阿母様、妾阿母様の子ですわねえ。」

斯う聞かれて、爲子はハツと思つたが、さあらぬ態で、

「さうですとも、何故お前は那麽事を聞くのです。」

「お隣りの喜美ちゃんかね、今日學校で、馨ちゃんは今の阿母様の眞個の子では無いつて云つたんですもの。」

「那麽事を喜美ちゃんが云つたのかえ。」

「え、喜美ちゃんかね、阿母様が話したんですつて、馨ちゃんは幼少時に貰はれて来たんだけど、眞箇の子の様に大切にされて幸福だつて、喜美ちゃんに云つたんですつて。」

「まア、喜美ちゃんの阿母様は嘘つきだね。」

「妾、此處へ貰はれて来たんぢやないわね。」

「さうですとも、妾がお腹を痛めて生んだんぢやありませんか。」

「それなのに、貰はれて来たんだなんて云ふんですもの、喜美ちゃんの阿母様は、眞箇に嘘つきだわね。」

馨の言葉を聞いて、爲子は外見には夫れと見せないが、心には云ひ知れぬ苦さを覺えたのである。

八桐の一葉

其の年の秋、忠直は風邪の心地で病床の人となつたが、不幸にも夫れが重い肺炎と變じ、醫者の薬も爲子や馨の厚い看護も其の甲斐なく、桐の一葉と諸共に、あはれ他界の人となつた。

爲子や馨の歎きは、此處に云ふまでもない事である。

忠直は、臨終の時、馨を枕頭に呼んで、紅葉の様な可愛い手を、瘠せ衰へた筋張

つた手で堅く握つて、

「馨！ お前は俺の子なんだから、甚麽事があつても俺を忘れて呉れるな。俺はお前が人の妻となつた姿を見て死に度いが既う駄目だ。俺が死ぬと、阿母様は他に頼る人が無いのだから、什麼か孝行をして呉れ……。」

と、云はれた時には、馨は云ふ迄も無いこと、傍に聞いて居た爲子もワツと其處に泣き伏した。

「子として親を忘れる者が何處の國にあらう？ 阿父様は何故あんな事を仰有るんでせう？」

と、馨は子供ながら不審に思つた。

悲みの裡に、其の年も暮れて、翌年の春の末、馨は再び悲い思ひを繰り返すことになつた。

忠直の死後、母の爲子は非常に身體が弱くなつて、薬餌に親しむ日が多くなつた。

が、年が改まつて櫻の花の咲く時分には、枕も上らない程の大病に陥つた。

馨の心配は一方でなく、一生懸命に看護をしたが、日にまし悪くなるばかりである。

或る時爲子は、苦しうに頭を上げ、枕頭に寂しく座つて居る馨の顔を、つくづく見詰めて、

「馨や、永い間よく看病をしてお呉れだね。けれども阿母様は最う直ぐに、阿父様のお側へ行くのです。阿母様は今改めて、お前に話す事がありますから、よつく聞いてお呉れ。實はねお前は、いつぞや喜美ちゃん云つた通り、妾の眞箇の子では無いのです。」

「えッ！ 夫れぢや矢ッ張り……あゝ妾什麼しやう。」

と、馨は驚くと同時に、其處へ泣き崩れた。

「阿母様はね、お前に心配をさせまいと思つて、實の親だと云つて、今迄お前を欺

して居たのです。これも皆なお前が可愛いからのこと、決して怨んでお呉でない。」
と、爲子は馨が棄兒であつた事を詳しく物語つた。

馨は棄兒と聞いて愈よ驚き、そしてまた、今の両親の育ての恩の厚い事を感謝したのである。

「さう云ふ譯でね、お前の生みの親は甚麼人か分らないが、若しもの時に、何かの手掛りになるだらうと思つと、妾が仕舞つて置いたものがあるのだよ。」

と、爲子は枕頭の手文庫から馨を拾ひ上げた時其の懐中から出た書付を出して、

「これはね、其の時お前の懐中に這入つて居たのだよ、役に立つ時があるかも知れないから、大切に仕舞つてお置きなさい。」
と、馨に渡した。

九父の遺産

折柄此處へ訪ねて来たのは、忠直と同役であつた飯島貫治と云ふ男である。

忠直に三千圓の貯金のあるのに目を付け、什麼かして其の金を横領しやうと、忠直の死後は折々爲子を訪ね、如何にも親切さうに見せかけて居た。

爲子は、貫治が那麼恐ろしい考へを持つて居やうとは知らないから、今の世に珍らしい親切な人だと衷心から感謝して居たのである。

今しも病人の傍へ座つた貫治は、

「什麼です奥さん、幾らか御氣分が良いですか。」

「お忙しい處を、度々お見舞ひ下さいまして、有り難う存じます、飯島さん、妾は既う迎も駄目で御座います。」

「那麼、弱い事を仰有つちや不可ませんよ、病氣は氣から出ると云ひますから、なるたけ氣を大きくお持ちなさい。」

「御親切に、さう仰有つて下さるのは有り難う御座いますが、是がお目に掛かり了

ひかと思ひますと、何だか悲しくなりました……。」

「そんな心細い事を仰有るものぢや無いです。馨ちゃんが可哀相ぢやありませんか。」

「其の馨の事に就きまして、貴下にお願ひ申し度い事が御座いますの、さぞ御迷惑でせうが、御承知下さる譯には参りますまいか。」

「甚麽事ですか、御遠慮なく仰有つて下さい。私の出来ませだけの事は致しますか
ら……。」

「他では御座いせん。妾が死にました後は、年齢も行かない馨一人が残のです。御承知の通り宅には相談相手になる様な近い親類が御座いせんので、馨のお世話をして頂く處が無いので困ります。如何でせう。貴下が引き取つてお世話くださる譯には参りますまいか……。」失禮な事を申すやうで御座いますが、忠直が遺して行きました貯金が三千圓ばかりと、他に少し公債や株券が御座いますので、夫れを

貴下にお預け申します。其の中から馨の入費や、お世話料をお差し引き下さいまして、是非御面倒を見て頂き度いので御座います。」

猫に鯉節とは是である。貫治は腹の中で、愈よ思ひ通りになつたと喜んだが、さあらの體で、

「世話料なんて奥さん、冗談仰有つちや不可ません、内村君と僕とは親友の間柄です。其の親友の遺子を、世話料を貰つて引き受けたと云はれては、世間へ對して耻入る次第です。金錢上の問題は別として、馨ちゃんは僕が引き取つて、屹度お世話致しますせう。」

「御承知下さいますか、有り難う御座います。」

「そしてね奥さん、内村君の遺産をお預りするやうでしたら、僕は充分監督して、馨ちゃんが年頃になられた時に、お引き渡しを致しますよ。」

「さう願ひますれば、馨は甚麽に幸福が分りません。」

と、何にも知らない爲子は、非常に喜んだのである。

今迄の氣の張りが緩むと、爲子の様子は急に變つて、其の夜十一時頃に馨の手を握り締めた儘、櫻の花の散る様に、脆くも忠直の後を慕ふて、永い眠りについて了つた。

去年の秋は父に別れ、まだ半年も経つか経たないのに、母に死んで行かれた馨の胸中は甚麼であつたらう。

一〇 茶碗の罪

爲子の葬式が済んでから、二三日経つと、馨は貫治の家へ引き取られた。

前にも云つた通り、貫治は親切心があつて馨を引き取つたのではなく、内村家の三千圓の金に目を呉れて、馨の世話をする事になつたのだから、思ひ通り内村の財産が自由になるやうになつてからは、馨に對する取扱は、實に冷酷なものであつた。

た。

主人がさう云ふ風だから、妻のお熊を始め、馨よりは二歳上の娘の近江までが、厄介もの扱ひにするので、馨の苦しさと言つたら無いのであつた。

馨は、育ての親の慈愛を、今更ながらしみじみ有り難く感じた。夫れと同時に、生みの親に什麼かして、逢ひ度いと思ふのであつた。

貫治の家は、馨が來てから、贅澤に生活す様になつた。これ迄は滅多に來た事のない、魚屋が來る酒屋が來る呉服屋が來る小間物屋が來る、と云ふ有様で、三人の膳の上には、三度々々美味いものが並べられた、親子三人は今迄にない綺麗な服装をして、物見遊參にも出掛けるのである。

それに反して馨は、此處へ來てからは今迄にない汚ない着物を着せられ、三度の食事も、味噌汁に漬物ばかりである。

或る日曜日の事であつた。食事の後形付けは馨がする事になつて居るので、晝飯

が濟むと食器を臺所へ下げて、流し元で一生懸命に近江の茶碗を洗つて居たが、什麼云ふ途端か手を止らせたので、ハツと思ふ間にカチャンと音がして二片に割れて了つた。

其の音を聞き付けたお熊は、眼尻を釣り上げて臺所へ出て来て、

「どうしたの？」

と、云ひながら、破れた茶碗に目を注ぎ、

「アラ、近江の茶碗を割つたんだね。何と云ふ事をするんです。何故割つたんです。」

「ハイ、あの、つひ手を止らせたものですから………什麼も濟みません。」

「濟みませんちやありませんよ。お前は無理に其の茶碗を割つたんでせう。」

「否え、まつたく………」

「それに違ひない。云ふ事があるから此方へお出でなさい。」

お熊は謝罪する馨の襟首を掴んで、居間へ引き摺るやうに連れて來た。

「さ、什麼云ふ譯で割つたのか、其の譯をお云ひなさい。」
「決して無理に割つたのぢや御座いません。まつたく………」
「何がまつたくです、剛情を張ると斯うですよ。」
と、お熊は處嫌はす馨を打つのである。
「小母さん、勘忍して、何卒勘忍して頂戴。」
と、馨は泣きながら、只管詫び入るのである。

二 小 き 嫉 妬

近江は日頃から、馨の美しいのを羨んで居たが、今は夫れが嫉妬となつて、邪魔になつてならないのである。

近所の人達が、

「馨ちゃんが年頃になつたら、甚だに綺麗でせう、屹度良い處へお嫁に行けます

よ。』

と、云ふのを聞く度に、子供ながら近江は厭な心持がするのであつた。そして罪もない馨が、憎くて憎くて堪らないので、

「馨ちやんなんか、死んで了へば可い、さうでなければ、火傷でもして、彼の美しい顔が醜くなれば可い。」

と、平素思つて居るのであるから、馨の不幸を喜び、幸福を快しとせぬのであつた。

母のお熊が今馨を虐待して居るのを見て、近江は嬉しくて堪らなかつた。

「阿母様、馨ちやんは妾が憎くて堪らないものだから、それで態と妾のお茶碗を破したのよ。」

と、憎々しく云ふと、

「屹度さうなんだよ、馨ちやんさうでせう。」

と、お熊は荒々しく云ふのであつた。

馨は泣きながら、

「否え。」

と、頸を振つた。

「剛情な子だねえ。」

お熊は斯う云ひながら、傍にあつた煙管を取り上げたかと思ふと、突然の頭を打つた。すると打ち處が悪かつたと見えて、

「ウーン。」

と、云ひさま、馨は仰向けに倒れて了つたのである。

「アラッ。」

と、流石のお熊も蒼くなつて、

「馨ちやん………馨ちやん………」

と、呼んで見たが、馨は既う蒼白になつて、息が絶えて居た。

「困つたねえ、飛んだ事をした。」

と、お熊は始めて後悔して、

「什麼したら可いだらう？」

と、居間を迂路々々して、途方に暮れた。

近江は、

「阿母様、馨ちゃんは死んだの。」

と、平氣なものであつた。

折柄、貫治が出先から歸つて來たので、お熊は此の事を話すと、非常に驚いて、

馨の顔を見詰めて居たが、

「飛んだ事をして呉れたな。」

と、貫治も途方に暮れたのである。

「什麼したら可いでせう。お醫者に診て貰ひませうか。」

と、お熊の云ふのを打ち消して、

生き蘇れば診て貰つても可いけれど、さうでないかと却つて面倒になるよ。什麼にか良い方法はないか知らん……」

元來、心の悪い夫婦であるから、什麼にか胡魔化して了ひ度いと、思案やるので

あつた。

あつた。

二三 竹屋の渡

貫治夫婦は、今夜こつそり、馨の死體を隅田川へ投げ込んで、犯した罪を隠すべく相談を決めた。

あまり遅く出掛けては、却つて人に怪まれると云ふので、其の夜の八時頃、お熊は馨の死體を脊負ひ、貫治と一緒に山の宿の家を出で、吉野橋を渡らずに右に折れ

て真直に、竹屋の渡へ来たのである。

時は夏の夜の事であるから、涼みの人が彼方此方に見えて、投げ込む折もない。暫らく様子を見て居たが、幸に人影が無くなつたので、此の時とばかり、兩人は馨の死體をザンプと川へ投げ込んで、後をも見ずに行つて了つた。

其の時、此處から四五間川下に舟を繋いで夜釣をして居たのは、今戸に住む佐吉と云ふ五十近い男であつた。

佐吉は水音に、ハツと驚いて、水面を見詰めると、人間らしい黒いものが流れて来たので、

「アッ身投げだ。」

と、直ぐに水中へ飛び込んで、救ひ上げて見ると、可愛らしい女の子だから、

「オイ確りしな、確りしな。」

と、佐吉は、馨の耳許で呼ぶと、不思議にも馨は、

「ウーン……………」

と、苦しうな息をして、目を細く見開いた。馨はお熊に打たれて、一時氣絶したのであつたが、今、水の中へ投げ込まれる途端に、息を吹き返したのである。

「お、氣が付いたか、まア可かつた。お前どうして恁麼川へ陥つたんだ。まさか身を投げたんぢやあるまい、過つて落ちたんだらう。」

斯う云はれて、馨は氣が付いて見ると、自分は何時の間にか、舟の上にビシヨ濡になつて、傍には見知らない人が居る。不思議で堪らないので、

「小父さん、什麼したんでせう。」

と、馨が尋ねると、

「什麼したんでせうは驚いたね、什麼したんだか分らないから、俺が聞いて居るのだ。」

「だつて妾、何にも知りません……………」

「冗談ぢやないよ、酒でも飲んで酔つ拂つて居たら、什麼したか知らないと言ふ事もあらうが、さうでない限りは、什麼して川へ陥つたか知らない奴も無いもんだ。」

「小父さん、妾お酒なんか飲まないの。」

「當然ぢやないか、お前の様な小さな子が、酒を飲んで堪るか、は、は、は、は、だから什麼して陥つたか聞いてるのだよ。」

「妾、知らないの。」

「あ、成程、お前一體低脳ないんだね。」

「何がたりないの。」

「話にならないや、お前の事を皆なが、莫迦だ莫迦だと云やアしないか。」

「否え。」

馨は、何が何やら夢心地で居るので、云ふ事が辻褃が合はないから、佐吉は低脳兒だと思つたのである。

一三 寫生ブツク

佐吉は馨を程近い自分の家へ連れて來た。

漸く心の落着いた馨は、佐吉に問はれる儘に、己が身の上話をしたのである。聞いた佐吉は非常に同情して、

「それでは何だね、お前さんが茶碗一個破した位で、お熊と云ふ女に煙管で叩かれたんだね。」

「妾が悪いんだから詮方がないのよ。妾ね煙管で打たれた事は知つてますけれど、夫れから後の事は、何にも知りませんの。」

佐吉は暫く考へて居たが、聽て膝を叩いて、

「夫れで漸うと様子が分つた。先刻水音のする前に、渡場に二個の影が見えたと思つたが、すると何だ、煙管で叩かれてお前さんが氣絶したのを、死んだと思やア

がつて、彼の渡場から川の中へ投げ込んだに違ひない。世の中にや、恐しい奴もあるもんだ。ナアに、既う心配する事アない、今夜から俺が世話をするから安心して居なさい。」

と、親切に云つて呉れたので、馨の嬉しさは、此の上も無いのであつた。

佐吉は、下駄の爪掛けを製造のを稼業として居るので、妻のお豊との間に、今年十五になる幸太郎と云ふ男の子があつて、貧しいながらも、三人睦じく暮して居たのであつた。

幸太郎と馨とは、五歳違ひであつたが、至つて仲が善く、まるで兄妹のやうである。

幸太郎は生れ來き繪が好きで、學校では何時も教師が舌を巻いて、

「十五の子供の書いた繪の様ぢやない。天才だ。今に立派な書家になれるだらう。」と、褒め讃やして居た。

或る日馨が、裏の椽側で、硝子の器に入れてある金魚を眺めて居ると、幸太郎が寫生ブックを持つて來て、

「馨ちゃん、さうしておいで、僕寫生して上げるから。」

「え、斯うして居れば宜いの。」

「あ、其の儘ジツとしておいでよ。」

と、幸太郎は、ブックを開いて、馨を見詰めながら鉛筆を動かした。

「アラ、幸ちゃん、今ね、此の斑の金魚が喧嘩してよ。」

「駄目だよ馨ちゃん、動いちや不可ないつて云ふのに。」

斯う云はれて、馨は急いで身體を、前の通りにしたが、

「それぢやア横を向き過ぎるよ。先刻の姿勢が可かつたのになア。」

馨は少し向き直して、

「此の位で宜いの。」

「あゝ、夫れで可い、今度は動いちや不可ないよ。」
「えい。」

暫くしてから、幸太郎は莞爾して、

「馨ちゃん、既う書けちやつたから可いよ。」

「さう出来て、見せて頂戴。」

と、ブックを覗いて見て、

「アラ厭だ、妾の頭に禿があるんだもの。可笑しいわ。」

「だつて是りやア、光線の工合だから詮方がないよ。」

「さう、だけでも妾に似て居るわね。」

「當然さ、馨ちゃんを書いたんだもの。」

幸太郎は毎日の様に、馨をモデルにして、寫生をして居るのである。

一四 心の苛責

山の宿の貫治夫婦は、馨が助けられて、程近い今戸に居るとは、夢にも知らないのである。

悪い事は出来ないもので、夫婦は、馨を隅田川へ投げ込んだ晩から氣が咎めて、落着いて寝る事が出来なかつた。毎晩の様に、怖い夢を見ては、魔魅れるのである。近所では、飯島の家へお化が出るよ云ふ噂をして、氣の小さい人は、移轉して行く始末であつた。

夫婦の身體は日に増し衰弱して、今は既う死人の様な顔色をして居る。

或る晩のこと、お熊は例の通り魔魅れて居たが、突然床の上へ起き上つて、目を見張つて何物を見詰める態であつたが、聽て、

「馨ちゃん、堪忍してお呉れ、那麽怖い顔をして睨めないで赦してお呉れ、妾が悪

るかつたんです。濟まない事をしました。此方へ来いと云ふんですか、さう、何處へでも行きますよ。」

と、立ち上つたかと思ふと、裏の雨戸を外して、狭い露路から、ふらりと出て行つたが、間も無く其の姿は、竹屋の渡場に現れた。

お熊は川縁に立つて、ジツと水の面を見詰めて居たが、

「馨ちゃん、赦して下さいよ。」

と、云ひながら、身を躍らせて水中へ飛び込んだ。

翌朝、貫治が起き出で、見ると、お熊の姿が見えないので、不思議に思つて居ると、取り付けの酒屋の番頭が、

「お宅の奥さんが身投げを爲すつて、今、吾妻橋の交番の前へ、死骸を引き上げられた處です。」

と、知らせて呉れたので、貫治は直ぐに飛んで行つて見ると、如何に犯した罪の結

果とは云へ、髪をおどろに亂して、悲惨しい姿で死んで居たのであつた。

此の態を見た貫治は、男泣きに泣いたのであつたが、夫れく手續が済んで、死體を自宅に引き取つてから、貫治の様子は何となく變であつた。

悔みに來て呉れた人々に、満足な挨拶が出来なかつた。

「ヤア、什麼も……ははははは。」

など、笑つて居るので、大概の人は驚いて歸つて了ふのである。

其の夜、貫治はお熊の枕頭で、咽喉を突いて自殺した。

近江は両親の死體に抱き付き、よよとばかりに泣き崩れたのである。

孤兒だと云つて、馨を虐待した近江は、今は人事でなく、自分の身に及んで來たのだ。

寄る邊なき此の拾小舟、行末は什麼なる事であらう。

一五 名高い畫家

馨は佐吉の家へ来てから、早くも五年を送つて、今年は既う十五の美しい娘になつたのである。

心だても至つて良く、小父さん、小母さんと、佐吉夫婦に纏るので、夫婦は自分の子の様に大切に、幸太郎同様學校へ通學はせ、今年の三月小學校を卒業した。幸太郎は去年、中學を卒業すると、是非とも立派な畫家になり度いと、一生懸命で勉強をして居たが、今日しも、書籍店から中學世界を買つて来て、

「馨ちゃん、可い繪を見せるからお出でよ。」

と、云ひながら、飽かず口繪を眺めて居た。

「ナアニ、幸ちゃん。」

と、馨は、幸太郎の傍へ寄つて、覗いて見ると、可愛らしい嬰兒が束髪の櫛を弄

んで居る繪で、畫題に「形見の櫛」としてあつた。

「アラ、可愛らしいこと。」

「可い繪だらう、有名な梅村香雨先生が書いたんだ。僕香雨先生の繪が一等好きだよ。」

「眞個に可い繪だわねえ。」

馨は、何となく引き付けられる様な氣がして、ジツと見詰めて居るのである。

「此の嬰兒は、何處か馨ちゃんに似て居る様な氣がするよ、馨ちゃんの赤ん坊の時は、怎麼顔付だつたらうと思へるね。」

「赤ん坊の時の顔なんか分るものぢやないわ。」

「何しろ全く氣に入つたね。」

と、幸太郎は、雑誌を離したり、近寄せたりして、一心に見惚れて居た。

馨は、香雨が自分の眞の父親であらうとは知らないりで、

「香雨と云ふ方は、那麽に名高い人なの。」

「香雨先生を知らないなんて、馨ちゃんは話せないね、今、日本の洋書家で五本の指に屈られる有名な人ぢやないか。」

「さう、妾ちつとも知らなかつたのよ。幸ちゃんも早く、さう云ふ名高い書家になると可いわね。」

「なるよ。屹度なるよ。香雨先生より未だ偉い書家になつて見せる。さうしたら馨ちゃんは、僕の……。」

幸太郎は口籠つて了つた。さうして顔を眞紅にしたのである。

「さうしたら什麼すると云ふの、え、幸ちゃん。」

馨は無邪氣に尋ねた。

「さうしたらね。」

「えい。」

「さうしたら……さうするのさ。」

「何だか全然り、分らないわ。」

「分らないかなア、僕が立派な書家になつたら、馨ちゃんの様な人と、結婚したいのさ。」

「まア。」

と、馨も顔を赤くした。

幸太郎は馨を戀して居るのであつた。

一六 新 平 民

或る日のこと、佐吉は馨に向つて、

「此の間から、俺ア話さう話さうと思つては居たんだが、良い事でないから今迄云ひ遅れて居たんだがね、今日は幸ひ家の者が誰も居ないから、思ひ切つて話しをし

て、馨ちやんの考へも聞き度いと思ふんだ。實はね、此の先き永く馨ちやんを、家に置く事が出来ないのだ。」

斯う云はれて馨は、悲し相に、

「何故で御座います、妾に何か悪い事でもあつて、置いて頂く事が出来ないのですか。」

佐吉は頸を振つて、

「さうぢやない、決して那麽事はない、俺はね、馨ちやんの様な、容色と云ひ性質と云ひ、揃ひも揃つて申し分の無い娘さんは、何時迄も、何時迄も、家に置き度いのは山々だが、それぢやア、馨ちやんの爲にならないんだよ。」

何か理由のありさうな、佐吉の話し振りなので、

「それは什麼云ふ理由なんです？」

と、馨は、早くも其の理由が聞き度いのである。

佐吉は云ひ難さうに、

「今、話すがね、馨ちやん、吃驚しちやア不可ないよ。」

と、聲を小さくして、

「俺の家は新平民なんだ……。」

「まア。」

と、流石に目の色は變へたが、佐吉の思つた程の驚きは無いのであつた。

「俺はね、宇都宮の在で生れたんだが、小さい頃から、新平民だの穢多だのと、衆人に蔑視まれて、それはく情け無い、悲しい思ひをしたのだよ。切而、幸太郎には那麽思ひをさせ度くないと、幸太郎が三歳の時に、此の東京へ出て来て、斯うやつて居るのだから、悪い事は何時人の耳に這入るか知れない。小さい頃なら兎に角これから花を咲かせやうと云ふ馨ちやんが、新平民の家で成長くなつたと云はれち

やア、出世の障害になるからね。今の内に、良い處があつたら、奉公に出て呉れる氣はないかね。其の方が馨ちやんの爲だらうと思ふんだよ。馨ちやんの身寄りの人にも引き取つて貰へば、馨ちやんも幸福なんだが、肝心の生みの親は、名前さへ分らないのだから、什麼する事も出来やアしない。馨ちやん、了解つたらうね。決して馨ちやんを邪魔にして、追ひ出すのぢやア無いから、思ひ違ひをしない様に、小父さんの心を汲んで呉れないと不可ないよ。」

と、佐吉は、つくづく云ふのであつた。

伏目勝ちに聞いて居た馨は、涼しい目を涙に曇らせて、

「分りました、小父さんはそれ程迄に妾を思つて下さるのね、濟みませんわ。だけれどね小父さん、妾は新平民だと云はれても構ひませんから、何時迄も小父さんのお側に置いて頂戴な。」

「えッ。」

佐吉は目を圓くした。

「身分は幾ら良くつても心の悪い人でしたら、立派とは云はれませんわ。たとへ身分は卑しくつても心さへ清かつたら、其の方が立派だと思ひますわ。」

斯う云つた馨の顔には、何となく神々しい光りが輝いて居る様に思はれた。

佐吉は、馨の手を堅く握つて、

「馨ちやん、小父さんは夫れを聞いて、何となく世の中が、明るなつたやうな氣がする。」

と、ジツと馨の顔を感じて見詰めて居るのであつた。

一七 百 花 園

千種の草花が、とりくりに咲き亂れて居る向島の百花園に、秋の柔い日を浴びながら、馨に萩の小枝を持たせて、一心に寫生をして居るのは幸太郎である。

「馨ちゃん、もう少しだから辛抱して呉れ給へ。」

「妾、もう足が痛くなつちやつてよ。」

「さうだらう、其の代り僕活動を奮發つて上げるから。」

「妾、活動なんか見度くないわ。」

「それぢや、芝居を見せて上げやう？」

「芝居も見たか無いの。」

「それぢや何が宜いの。」

「何にも見たかないわ。」

「慾がないね。ぢや晩に焼芋でも買つて上げやう。」

「まア。」

と、馨は笑ひ出した。

「笑つちや不可ないよ、姿勢が崩れるぢやないか。」

「だつて幸ちゃんか笑はせるんですもの……。」

幸太郎は漸く書き終つたので、

「さア出来た。御苦勞々々々。」

「もう可いこと、さう……。」

と、馨は幸太郎の傍へ来て、

「まア、綺麗に出来たわねえ。」

「僕、梅村先生の筆意を學んで書いたんだよ。」

「幸ちゃん梅村先生が、餘程好きね。」

「大好きさ、僕は先生の門生になりたいと思つてる位だもの。」

先刻から、幸太郎の背後に立つて、熱心に其の書を見て居た、四十二の立派な

紳士がある。

紳士は、此の時口を開いて、

「君は眞個に、香雨の門生になり度いのかね。」

と、突然に聞かれたので、幸太郎は不審氣に紳士の顔を見詰めながら、

「さうです、是非先生の畫風を學び度いのです。貴下は梅村先生を知つて被らつしやるのですか。」

紳士は莞爾して、

「僕が梅村香雨だよ。」

「エツ、貴下が……さうでしたか、まだ一度もお目に掛からないものですから、どうも失禮致しました。」

と、幸太郎は恭しく禮をした。

「先刻から君が畫くのを見て居たが、君は確に天才だ。それだけの才筆を持つて居たら、屹度、美術界へ名を成す事が出来やう、君が望みとあらば、門生にして上げるよ。」

「先生、眞個ですか、僕は恁麼うれしい事はありません。」

と、天へでも昇る様に喜んだのである。

香雨は此の時、馨に目を移して、ジツと目成つて居たが、

「これは君の妹さんかね。」

と、幸太郎に尋ねた。

「否え、さうちやありませんが、小さい時から兄妹同様に育てられたので、妹の様に居るんです。」

「さうですか。」

と、云ひながら、香雨は何か考へ込んで居た。

眞の親子が目の前に居りながら、それと知らない香雨に馨は、其の儘別れて了つたのである。

一八 天女のモデル

其の翌日から幸太郎は、香雨の家の立廻番をしながら、繪を習ふ事になった。或る日、幸太郎は今戸の家へ来て、用事あり氣に佐吉に向ひ、

「阿父様、馨ちやんは……」

「今、鳥渡使ひに行つたよ、何か用か？」

「先生の用があるんです。」

「さうか、甚麼用だい。」

「阿父様に話したつて分らないよ。繪の事なんだから……」

「アラ、幸ちやん、宜く入らしたのね。」

「今日はね、僕、馨ちやんにお願ひがあつて来たんだ。」

「さう、甚麼こと？」

「先生がね、來年の展覧會へ天女の畫をお出品になるので、是非、馨ちやんにモデルになつて貰ひ度いと仰有るんだ。」

「妾、もう、モデルは御免よ。」

「何故？」

「此の前百花園で懲りちやつたわ。」

「は、は、は、彼の時は、僕が何時迄も立たせて置いたから悪かつたんだ。今度は先生がお書きになるんだから、大丈夫だよ。第一名譽ぢやないか。名高い先生の筆で書かれて、展覧會へ出るんだからね。」

「妾、それは暫く考へて居たが、

「妾、それぢや、なるわ。」

「承知して呉れるね。有り難う、それぢやね、先生の御都合の可い時に迎ひに来る」

から、屹度来てお呉れよ。」

「え、何時でも行つてよ。」

佐吉は幸太郎に、夕飯を食べて行けと云つたが、幸太郎は家よりも先生の處の方が、御馳走があると云つて歸つて了つた。

* * * * *

此の四五日後から、佐吉の家の前を竹の杖を突張りながら、

「盲目に何卒、頂かせて下さいまし。」

と、聲も哀れに、朝夕通る六十五六の老婆の乞食があつた。

今朝も、馨が甲斐々々しく、表の掃除をして居ると、例の通り、

「盲目に何卒、頂かせて下さいまし。」

と、云ひながら歩つて來た。

時は秋の末であるから、昨日迄は汚いながら袴を着て居たのが、今朝は何だしたのか、白の飛白が鼠色に化けて、處々に穴のある單衣を着て、震へて居るのである。

馨は氣の毒に思つて、

「待つてらつしやい！ 進びますから。」

と、家内へ這入つて、自分の小遣錢の内を、何程か出して、老婆の手に握らせた。

「有り難う御座います。お年齢も行かないお嬢様のやうですが、お情け深い……」

有り難う御座います。」

と、叮嚀に、お低頭をした。

「お婆さん、什麼してお乞食なんか仕て居るの。」

と、馨が聞くと、

「罰が當つたんで御座います。今になりまして始めて悪い事をしたと、後悔んで居

るので御座います。」

「甚麽悪い事をしたの。」

「はい……懺悔とかを致しましたら、幾らか罪が軽くなるかも知れませんが、包まずお話し致します。少し長くなりますが、貴女聞いて下さいますか。」

「え、聞いて上げてよ、此處は往來ですから店の腰掛へ入らつしやい。」
と、馨は老婆の手を取りて、店先きの椽臺へ腰を下させた。

一九 なれの果

老婆は鼻を吸りながら、

「妾は、棄兒を致しまして御座います。」

「えッ。」

棄兒と聞いて、馨は胸を轟かせて、

「何時何處へ棄てたの？」

「左様で御座います。今から丁度十五年前の雪の晩、上野の西郷さんの銅像の前へ棄てたので御座います。」

老婆は、其の當時の事を思ひ出してか、ぶる／＼と身を震はせた。

馨は轉倒らんばかりに驚いたが、氣を取り直して、

「其の子の名は馨と云ふんぢやないの。」

「貴女、什麼して夫れを御承知で……」

「知つてる筈よ、妾が其の馨ですわ。」

「えッッ！」

と、老婆は吃驚して、思はず手にして居た杖を放り出した。

馨は老婆の側へ身を摺り寄せて、

「什麼して妾を棄てたのです？ 阿父様や阿母様は、什麼いふ方だか早く教へて下

と、急ぎ込んだ。

「貴女の阿父様は、梅村香雨と仰有る書家なので御座います。」

「えッ、そ、それは、眞個ですか。」

餘りの驚きに、馨はろく／＼口も利けないのであつた。

此の乞食の老婆こそ、憎むべきお辰のなれの果である。

お辰は尙ほ一伍一什を詳しく馨に物語つた後、馨の止めるのも諾かず、何れへか立ち去つて了つた。

香雨が自分の眞の親だと知つた馨は、早く親子の名乗りが仕度いと思つて、佐吉夫婦に此の事を話した上、身仕度をして直ぐに香雨の家を訪れたのである。馨の胸は波立つて居た。

取次に出て来たのは幸太郎で、

「馨ちゃん、可い處へ来て呉れた。先生が今日から天女の作にお着手になるので、僕、これから、馨ちゃんを迎ひに行かうと思つてた處だ。さア、お上り……………」

と、玄關へ通してから、

「何か用があつて来たのかい。」

「えッ、妾、阿父様に逢ひに来たの。」

「阿父様に……………」

「漸つと分つたの。」

「さうかい、それは可かつた。一體馨ちゃんの阿父様は、什麼いふ人だつたね。」

「妾の阿父様はね、此處の先生でしたの。」

「えッ、梅村先生が馨ちゃんの阿父様……………」

と、幸太郎も、一方ならず驚いた。馨はお辰から聞いた丈の事を、落もなく幸太郎に話したのである。

二〇 嬉し涙

詳しい話しを聞いた幸太郎は、馨を香雨の書室へ案内して、

「先生！意外の事件が起りました。」

と、新兵が上官の前へ来た時の様に、落着きの無い不動の姿勢で斯う云ふと、

「甚麽事か、話して見給へ。」

と、香雨は不安の顔色で、幸太郎を見詰めたのである。

「先生は今から十五年ばかり前に、馨と云ふお兒さんを、お辰と云ふ婆さんに、お預けになつた事がありますか。」

幸太郎が斯う云つて尋ねると、香雨は顔を曇らせて、

「那麽事は、誰にも話した事はないんだが、何處から君、聞いて来たね。」

と、不審さうに云ふのであつた。

「それぢや先生、お覚えがあるのですね。」

「あるとも……僕は、其の子供の事ア、一日も忘れた事はない。」

と、沈んだ調子である。

是を聞いた馨は思はず香雨の傍へ飛び寄つて、

「阿父様ッ。」

と、其の膝へ取り付いた。

突然であるから、香雨は聊か驚いて、

「貴女は何して僕を阿父様と呼ぶんです。」

と、馨の顔をジツと目成つた。

「阿父様！妾、馨で御座います。」

「えッ、それぢやお前が、十五年前に、お辰の手に渡した馨だつたのか……。」

「阿父様！妾逢ひ度う御座いました。」

香雨は馨を堅と抱き締めて、

「馨！ 可く無事で居て呉れた。定めて苦勞した事だらう、赦して呉れ。」
 親子は暫く嬉し涙に暮れて居たが、聽て、

「阿父様、何卒阿母様に逢はせて下さい。」

これを聞いた香雨は身を切られるよう辛かつたのである。

「定めて阿母様にも逢ひたからう……だがな馨……お前の阿母様は、十五年前にお前を遺して静岡の實家へ歸つた限り、今は何處に居るのか、生死さへ分らないのだ。何卒阿母様の事は断念して二度と云ふて呉れるな。」

と、香雨は苦しうに云ふのであつた。

斯かる處へ、香雨の妻の咲子は、今年十歳になる一人息子の幹雄を連れて、何の氣なしに書室へ這入つて來た。

此の時迄、茫然して立つて居た幸太郎は夫れと見て、

「先生、奥様が入らつしやいました。」

と、注意すると香雨は咲子を見遣つて、

「咲……常々お前に話をした、これが娘の馨だよ。」

「まあ、さうで御座いますか、妾も貴郎がお話しをなさる度んびに、什麼して在らつしやるかと案じて居ましたけど、御無事でお逢ひが出来て結構で御座いましたのね。」

「馨、これがお前の二度目の母だ、眞個の阿母様だと思つて、孝行しなけりや不可ぞ。」

「ハイ。」

其の日から馨は、香雨の家へ引き取られた。

繼母ではあつたが、咲子は實の子の様に馨を大切にして可愛がつて呉れるので、久しく霜に惱み雪に打たれた梅の幼木も、漸く温き春を迎へたのである。

二 天 覧 會

香雨が心血を注いで書いた天女の繪は、翌年の春、上野に開かれた美術展覧會へ出品して一等賞を得た。香雨の名は益々高まつたのである。と同時に展覧會で人目を引いたのは、「姉と弟」と題した油繪で、それは、幸太郎が馨と幹雄をモデルにして書いたので、見る人毎に其の才筆を褒め讃やした。

今日しも展覧會へ来て、「天女」と「姉と弟」の繪を飽かず眺めて居る丸鬚に結つた三十五六の美しい立派な婦人があつた。

折柄、二人の學生が、其の婦人の傍に立つて、

「君、これが、香雨先生の書いた有名の『天女』だよ。」

「實に可いね。」

「まつたく可いよ、此の繪はね、先生が令嬢をモデルにして書かれたのださうだ。」

「さうかい、令嬢は却々美人だと見えるね。」

「君これを見給へ。」

と、「姉と弟」の繪を指して、

「此の繪はね、の先生門生が令嬢と令息をモデルにして書いたんだ。」

「これも却々可く出来てるね。」

「實に天才ぢやないか、青年畫家の作とは見えないね。」

「香雨先生の筆方に酷似だ。」

此の會話を聞いて居た婦人は何故か涙を滾したが、急に足を事務室の方へ早めた。學生は云ひ合せた様に夫れを見送つて居た。

「君、今の奥さんは此の繪に酷く似て居たぢやないか。」

「さう、僕も同感だ、此の繪に酷く似て居るのは取りも直さず梅村先生の令嬢に酷似なんだ。」

「それに君、泣いてた様ぢやないか。」

「慥に涙を出して泣いてたね。」

「涙を出さないで泣けるかい。」

「腹で泣いてる時は、涙が出ないよ。」

「人形見た様だね。」

「は、は、は、は、は。」

「は、は、は、は、は。」

間もなく此の二枚の繪の傍に、「賣約濟」と書いた赤い紙が貼られた。

婦人は馨の實母の文子であつた。

文子は、今から十六年前、曾て戀仲の香雨と、親の許さぬ縁を結び、下谷の中根岸に世帯を持つて、間もなく馨を生むと、手の中の玉と育し、二人の愛情は日に増し濃かに楽しい月日を送つて居たが、物堅い父の爲に生木を割かれ、愛しい馨を

置いて静岡へ歸つてから、三年ほど經つと、横濱の金満家で大野高七と云ふ、評判の良くない人の處へ嫁入りをして、今では濱子と呼ぶ十三になる可愛い娘迄あるのであつた。

今度の展覧會には、香雨が娘の馨をモデルにして畫いた繪が、一等に當選したと聞いたので、文子は夫れが見たくて堪らず、今日夫高七が上京したのを幸ひ、一緒に來て見る積りであつたが、何せよ高七は慾一方の人で、美術に興味を持たないところから、繪なんぞ見ても詮方がないと云ふので、文子は一人で來て、二千圓を投じて二枚の繪を買ふ事にしたのである。

二三 水

煙

其の年の夏香雨は、家族を連れ連れて、スケートで名高い信州の諏訪へ避暑に出かけた。

馨は、宿にばかり居るのも、怠屈だと云ふので、一人ぶら／＼湖水の端まで来て見ると、十三位の東京から来て居るらしい娘が矢張り一人で、土地の十二三になる男の子が舟に乗つて釣をして居るのを茫然して見て居たので、馨は何となく懐しく思ひ、其の傍へ寄つて、

「貴女、東京から来て在らつしやるの？」
と、莞爾して尋ねた。

「否え、妾横濱なのよ。」

「さう……………」

「貴女は……………」

「妾東京よ、何處に止宿つて在らつして？」

「牡丹屋と云ふ家よ。」

「さう、妾ね諏訪ホテルに居りますのよ、何時入らつして？」

「今日で一週間になりますの。」

「誰方と入らつして？」

「阿父様と阿母様と妾と三人よ。」

「さう、妾ね、来てからまだ五日なんですけれど、既う飽きちやつたのよ。貴女遊びに来て頂戴。妾、梅村馨と云ひますの、失禮ですけれど貴女は……………」

「妾、大野濱子と云ひますの、妾の處へも遊びに入らつしやいな。」

「え、有り難うよ。」

兩人は初めて會つたのだが、何となく氣心がしつくり合ふやうな氣がして、互に頼母しく思つた。

それも其の筈で、兩人は父こそ違つて居るが、同じ腹から生れた姉妹なのであつた。

那麼事とは夢にも知らない兩人は、尙ほ種々と話し續けて居たが、聽て濱子が、

「貴女、彼の舟に乗つて遊びませんか?」

「止ませう、危険から……」

「大丈夫よ、妾昨日乗せて貰つたんですの。」

「さう、ちや乗つて見ませうか。」

「乗つて御覧なさいよ。面白いわ。」

「妾、彼の子を呼びませう……貴下……舟の人……ねえ小僧さん!」

と、馨は種々に呼ん

「ほゝほゝゝ。」

「ほゝほゝゝ。」

と、互に袂で口を隠して笑つた。

男の子は振り向ひて、

「俺、呼んでるだかね。」

「さうよ、お願だから妾達を其の舟に乗せて頂戴よ。」

「女なんか危険から、お止しよ。」

「だつて昨日、妾を乗せて呉れたぢやなくつて?」

と、濱子が云ふと、

「二人なら可いけれど、今日は二人ぢやねえか。」

「二人だつて大丈夫よ、乗せて頂戴な。」

と、昨日馴染になつた濱子が頻に云ふので、質朴な田舎の少年は退けかねて、

「ちやアお乗りよ。」

と、舟を湖水の端へ着けて呉れた。

兩人は嬉しさうに乗ると、舟を舊の處へ漕ぎつけて、

一箇にして居ねえと、危険だよ。」

と、再び釣を始めた。

「ねえ鳥渡、彼處に澤山煙突が見えるわね、彼れは何アに……？」
と、馨が少年に尋ねた。

「ありやア、岡谷の製糸場だよ。」

「さう、彼處の森の處にお鳥居が見えるわね、彼れは何アに……？」

「下諏訪の明神様だよ。お祭りの時にや、そりやア賑やかだせ、諏訪の町は人で一杯になるだよ。」

「さう、神田の明神様より賑やかなの。」

「神田ッて何處だね。」

「アラ、神田の明神様を知らないの。」

「知らねえよ、諏訪にや上諏訪と下諏訪に、明神様ア二社しかねえだよ。」

「諏訪の事ぢやないわ、東京よ。」

「あゝ東京か、俺東京へは行かねえから知らねえ。」

「さう………彼處に高い石崖があるわね、彼れは何アに……？」

「喧しいな、彼れは昔のお城の跡だよ、今は公園になつてるだ。少し静にして居ねえと、釣が出来ねえよ。」

「アラ富士山が見えてよ。」

と、濱子は突然に立ち上つた。

「何處に……？」

と、馨も續いて立ち上つたが、何うした機みか濱子は、よろゝいと躊躇いて、湖水へ落ち込む途端、馨の手に掴つたので、馨は濱子の力に引かれて、

「アッ。」

と、云ふ聲諸共、兩人は水煙りを立て、水中へ落ち入つた。

少年は驚いて、舟の中から大声を揚げて救助を求めた。

二三 死の手

此の時、短艇に乗つて居た一人の中學生らしいのが、其の聲を聞き付けて、急ぎ水中に飛び込むと、少年も夫れに續いた。

懸て中學生らしいのは馨を抱へ、少年は濱子を抱き、漸く舟に引き上げ、早速最寄りの醫師を迎へて共々に介抱した。すると、馨は幸ひに息を吹き返し、一命を取り止める事が出来たが、濱子は無惨にも落命したのである。

此の報に接して検死の警官が来る。香雨夫婦も高七夫婦も駆けつけた。そして香雨夫婦は馨の助かつたのを喜び、高七夫婦は濱子の死骸に取り付いて悲しんだ。

香雨は我が子の再生の恩人たる中學生らしい青年に向つて、

「僕は、貴君に助けて頂いた娘の父親で、梅村香雨と云ひます。危い娘の命をお救ひ下さつた御恩は終生忘れません。誠に有り難う存じました。」

と、厚く禮を述べると、

「貴下が香雨先生でしたか、お名前は夙て承知して居りましたが始めてお目に掛ります。私は諏訪の中學五年生で川島清一と云ひます。令嬢の御命が助かつたのは、令嬢に御壽命があつたので、私の力では御座いませんから、お禮を云つて頂いては却て恐縮します。」

中學生としては立派な應對振りであるから、香雨は事の外感心して、

「いや、さう謙讓されては困ります。して貴君のお宅は何處ですか。」

「直ぐ其處なんです……先生、禮なんぞにお出で下すつては困ります。」

香雨は其の住所を再三尋ねたが、清一は何うしても云はなかつた。

此の時香雨の妻の咲子は、清一の傍に寄つて、

「妾は梅村の家内で御座います。危い娘の命をお助け下さいまして、何共お禮の申上げ様が御座いませぬ。有り難う御座いました。」

と、香雨同様厚く禮を述べた。清一は香雨に對した時と同じ意味の挨拶をした。

「是非お處を何卒……」

咲子は香雨に代つて斯う尋ねたが、清一は矢張り答へなかつた。そして、

「私失禮致します。」

と、行き掛つた、すると檢死の警官が、

「君、鳥渡待つて下さい。」

と、呼び止めた。

「僕ですか、何か御用……」

清一は警官の傍へ寄つた、警官は叮嚀に、

「私は職務上貴下に尋ねる事があるので、貴下の住所は何處ですか。」

職務上とあつては、清一も答へない譯には行かなかつた。

「北本町十二番地です。」

「姓名は……」

「川島清一。」

「年齢は……」

「十九です。」

「諏訪中學の五年生だと云ひましたね。」

「さうです。」

「救命當時の模様を話して下さい、概要で可いです。」

清一は問はるゝ儘に、其の時の有様を物語つたのである。聞き了つた警官は、

「さうでしたか、いや御苦勞でした、もうお歸りになつても宜しい。」

「では失敬します。」

清一は斯う云つて警官に鳥渡頭を下げ、香雨夫婦に改めて挨拶して、此の場を去つた。

二四 見合す顔

濱子の死骸に縋り付いて居た文子は、暫く夢中であつたので、此處に香雨が居るとは気が付かなかつた。香雨も亦、夫れが文子であるとは知らなかつた。

検死が了つて、濱子の死體を引き取る時になつて、文子は始めて香雨と顔を見合せ、

「アラッ、貴郎は……。」

と、思はず口走つた。此處に高七や咲子が居なかつたら、文子は香雨に縋り付いたであらう。香雨も思はず胸を轟かした。

以前は兎に角、今はお互に、良人があり、また妻があるのだから、香雨は咲子を促し、馨を肩にして宿へ歸つたのである。

文子は彼の少女が馨であると思ふと、懐くて堪えられなかつた。「一言『馨』と呼ん

で見たかつた。文子は茫然と香雨が肩にして行く馨の姿を見送つた。

最前から文子の様子が可怪しいので、高七は文子の傍へ寄つて、

「文。」

と、呼びながら、其の肩を叩いた。

文子はハツとして振り向くと、其處には良人が不快な面色で突つ立つて居た。

「貴様は何を茫然見て居るのだ。」

高七は文子を貴様と云つて居た。

「ハイ……。」

「ハイぢやない、貴様は彼の男を知つてるのか。」

「ハイ……否、別に……。」

「隠しちや不可、知つてるのだらう。」

「否、全く存じませんので御座います。」

「存じません者を、何故那麽に見惚れて居たのだ。殊に先刻彼の男の顔を見た時にも驚いたやうに、「アラッ貴郎」と、口走つたぢやないか、貴様知つてるんだらう。」

「眞個に知らないので御座います。實は可く似た人でしたから、妾其の方と見違ひましたのです。」

「其の方とは一體誰の事だ。」

「アノ妾の親類の者なので御座います。」

「親類の誰に似て居るのだ。」

高七の追窮は益々烈しい、文子は咄嗟の場合であるから、深い考へも出でず、口から出任せの事を云つて居るので、良人に段々問ひ詰められて何と答へて可いか殆ど當惑したのである。

文子は濱子の死骸を、何時迄も湖水の端に置くのは可哀相でならなかつた。

「其のお話しは宿へ参りましてから、悠然申上げます。兎に角濱子を引き取つて、宿迄参りませう。」

「那麽事は何うでも可い、一體彼の男は誰に似て居るのだ。」

「夫れは宿へ参りましてからの事にして、早く濱子を……」

「濱子なんか棄て、置き、夫れよりは今の返事をしろ。」

天下に恐らく高七程没常識な男はあるまい、最愛なるべき我子の無惨な死骸を路傍に晒しての此の有様は、到底人間が爲し得可き行ひではないのである。

二五 嫉風妬雨

田舎の事であるから、東京程物見高くはないが、夫れでも老若男女三四十名、湖水を境に弓形を造つて、ワイ／＼騒いで居た。

「彼處に居るのが、兩親だと云ふぢやねえか。」

「さうよ。」

「死人を投げ出しときやアがつて、何をして居るんだい。」

「夫婦喧嘩さ。」

「まさか。」

「可愛い子供を亡したので、気が違つたのだよ。」

「さうかも知れない。」

見物人は口々に、恚廢事を云つて居た。流石に高七夫婦の聲は小さかつたので、夫婦の話の要領は見物人には聞えなかつたのである。

警官は近寄る見物を制して居たが、此の時高七夫婦の傍へ来て、

「貴下方は何うして死體をお引き取りにならないのです。何時迄も恚うして置いては、娘さんが可哀相ぢやありませんか。」

「只今引き取ります。」

高七の聲は高かつた。警官に引き取り方を追られては、高七も平気で居る譯には行かなかつたので、文子に對する追窮は一時中止して、死骸を一先づ旅宿へ運び込んだ。

宿の主人夫婦を始め、番頭女中に至る迄、一々高七夫婦に悔みを述べた。文子は死骸の枕邊に座つて眼を泣き腫して居た、高七の顔色は青かつたが、夫れは濱子の死を悲むよりも、寧ろ文子の訝い態度を氣にして居たからであるらしい。

宿の者一同が入り換り立ち換り悔みに來るので、一時騒しかつた高七夫婦の部屋も、聽て夫れが無くなると、急に寂しくなつて了つたのである。

「文!。」

高七の呼んだ聲は高かつた。

「ハ……………イ。」

文子の返事は低かつた。

「貴様先刻の男は、親類の者に似て居ると云つたな。」

「ハイ申しました。けれども良人、最う其のお話しは可いでは御座いませんか、今は那麼お話しを致して居る場合ぢやないんですもの……」

「いや、是非共聞かねばならない場合なんだ。己に取つては濱子の處分よりも、此の方が先決問題なのだ。」

「夫れは怎う云ふ譯で御座います。」

「貴様にや分るまい、ぢやア話すから可く聞いて居ろ。貴様は彼の男を何のかんのと云つて胡魔化して居るが、己はぢやんと察して居るのだ。彼の男は貴様が以前關係して居た男だらう、いや或は現在も關係して居るのかも知れない、さうなると濱子は己の子か、彼の男の子か分らない事になるのだ。若し彼の男の子供だとすれば己は濱子の處分をする必要がないから、彼の男にさせるが可いのだ。」

「良人、夫れはあんまりです、あんまりで御座います、妾那麼覚えは毛頭ないので

す。」

文子は立派に憊う云つたが、心の中は辛かつた。

「貴様に怪しい素振りがあればこそ云ふのだ。夫れが無理だと思ふのか。」

「否、決して御無理だとは思ひません……」

「那麼ら立派に辯明して見ろ、若し貴様に暗い事がないのなら、己に疑はれて黙つては居られない筈だ。」

高七は濱子の死骸には、目も呉れなかつた。そして口先きでは強い事を云つて居るが、腹の中では、彼の男は文子の云ふ通り、親類の者に似て居たと云ふまで、何等關係がなくて呉れ、ば可いと思つたのである。

二六 親の因果

文子は一思ひに、以前の香雨との關係を打ち明けて、清々した心持ちにならうか

と考へたが、夫れを打ち明けければ、無論騒ぎが持ち上る。濱子を恚うして置いて、
那麼騒ぎは仕度くないと思つたから、

「其の辯明は横濱へ歸つたら屹度致します。何しろ恚うやつて、何時迄も濱子を此
處に置く譯には参りませんし、第一宿が迷惑致しますから、直にも横濱へ歸るやう
にして頂きたう存じます。」

高七は却々承知をしなかつたが、文子が事を分けて頼むので、高七も漸く其の氣
になつて、直にも歸る可く用意萬端を整へ、濱子の死骸も棺に納めたが、汽車の都
合で出發は明日の一番列車と云ふ事になつた。

翌朝になると宿の人達が親切に、總ての手續を濟ませて呉れたので、早速遺骸を
守つて歸濱る事が出来た。

南太田町の高七の留守宅では、變事の電報に接して一方ならぬ騒ぎであつた。夕
刻歸宅するとの事であるから、家の者や、親戚の人が停車場迄出迎へて居た。

世間に金貨は多いが、高七程剛愎非道な男はあるまい、非常な高利を食つた上、
期限が一日でも遅れやうものなら、如何なる方法手段を取つても其の貸付けた金を
徴收せずには置かなかつた。時には病父の藥餌の料や、子供の授業料迄取り上げら
れた債務者もあつた。であるから借りた人は勿論、借りぬ者迄高七を憎む事甚だし
く、彼は其の姓の上に鬼の一字を冠せられて、鬼大野と呼ばれて居た。

されば此の度の慘事を聞いて、氣の毒だと云つて彼に同情する者は一人もなく、
寧ろ夫れを喜んで、

「天罰なんです、氣味が可いぢやありませんか。」

「是からは彼奴も、幾らか人情と云ふ事が分るでせう。」

「何に駄目ですよ、人の命より金の方が大事な奴なんですからね。」

「恚うかして、酷い目に合はせて遣りたいものですな。」

高七を知る人は、彼方でも此方でも、顔さへ合ふと恚廢話をして居た。

濱子の葬儀は其の翌日執り行はれたが、親戚以外の會葬者は僅十四五人で、至つて寂しい葬式であつた。

二七 彼の娘

文子は飽きも飽かれもせぬ香雨との仲を裂かれ、愛児馨を遺して、中根岸の家に後髪を引かれながら、父の昇に伴はれて静岡へ歸つて以來、少しも外出を許されなかつた。文子も亦出て見たいと思はないので、一室に閉籠つて香雨や馨の身の上を案じ暮して居た。

けれども夫れは東京を去つて三四ヶ月の間の事で、月を重ねるに従ひ香雨や馨を思ふ情は柱曆の如に、日一日と薄らいで、今では那麽事は思ひ浮べなくなつて了つた。最う大丈夫と父も許し、文子も家にはかり居るのは退屈で堪らないので、此の頃は時々散歩に出掛けるやうになつた。

其の時分高七は病後であつたが、静岡邊へ轉地をしたら可からうと云ふ醫師の侑に従ひ、幸ひ静岡には叔父に當る小島と呼ぶ親戚があつたので、其處の一室を借りて静養して居たのである。小島は文子の家の直ぐ隣りで、父の昇と小島の主人とは氣心が合つて居たので、文子が静岡の小學校へ通學して居る頃から、互に行つたり來たりして居た。

高七は朝に夕に、美しい文子の容色を見て、少なからず心を動かしたのである。或る日高七は叔父に向つて文子の事を尋ねて見た。

「叔父さん、隣りに可い娘が居ますね。」

「うむ、以前から此の邊で評判の美人だつたが、東京へ行つて來てから一層可くなつた。」

「東京へ行つてたのですか、學校へでも……」

「さうだ、女子大學へ行つてたのだがね。歸つてから最う半歳位になるだらうよ。」

卒業したのですか。」

「さうだらう、學問も出来るさうだからな。」

小島は、文子が東京に居た時の事は、少しも知らなかつた。

「何と云ふ名なんです。」

「文子さんと云ふのだ。」

「何歳になるのでせう。」

「さア、住江と一歳違ひだつたから、二十二だね。」

住江と云ふのは小島の娘で、文子の朋友であつたが、今は他へ縁付いて居るのである。

「さうですか、丁度可いな。」

「何が丁度可いのかな。」

「實はね叔父さん、僕彼の娘を嫁に欲しいのですが、呉れないでせうか。」

「さうさね、呉れない事もあるまいが……しかし文さんは、理想が高いさうだからの。」

「那麼に理想の高い女ですか。」

「己も可くは知らないが、兎に角女子大學を出て居るんだらうから、幾ら金があつても中學卒業位ぢや、何うかと思ふんだ。」

「駄目でせうか。」

高七は力のない聲で、憊う云つた。

「夫れは話して見た上でないと、分らないがね。」

「ぢやア、不可ない迄も、烏渡話して見て下さいよ。」

「何れ折を見て、一應話して見やう。」

「憊う云ふ事は早い方が可いのです、是れから行つて来て頂けませんか。」

「直ぐに行け、ははは、大分お急ぎだの。さう云ふ事なら、是から行つて一つ

當つて見やう。」

「何卒お願い致します。」

小島は帯を締め直すと、隣家を差して出て行つた。

二八 橋 渡 し

一時間程経つて、小島は歸つて來た。高七は其の顔を見ると、

「叔父さん、何うでした。」

と、早速尋ねた。

「駄目だ。」

小島は頸を振りながら恚う答へて、高七の傍に座つた。高七は失望の色を見せ

て、

「矢張り駄目ですか、先方は何う云ふ返事をしたのです。」

「始から己の甥だとも云へなかつたから、他人のやうな積りにして、五萬圓からの財産があつて、姑はあるが小姑と云ふものはなし、四五人も雇人を置いて、至極氣樂な家だから、文さんを嫁にやつたら何うかと云つた處が、本人は何をして居るのかとも、甚麼男かとも聞かない先に、金持ちは私は嫌いだ。此方に金が無いのだから、那麼處へ娘を嫁れば世間で碌な事を云ひはしない、私も軍人だ、那麼事は云はれたくないからお断りすると、さつぱりしたのもさ、重ねて云ふのも何だから其の儘歸つて來た譯だがね、まア斷念の方が可からうよ。」

「一體其の親爺と云ふのは、何をして居る人なんです。」

「海軍の大佐なんだがね。後備になつて今は遊んで居るのさ、幾らか蓄め込んで居るだらうし、廣と云ふ伴が裁判官をして居るから、毎月生活費は送つて寄越し、其の外恩給だの、勳章年金だの、毎年残る一方だらうよ。」

「さうですか、可い株なんですね。幾らかあるのなら只遊ばせて置いても詰らない

から、切而一割位に廻したら可いでせうにね、銀行利子なんか仕様がありませんからね。」

「金貸しは直ぐ夫れだからな、ははは、何うして、坂上さんなんざア堅いんだから、那麽考へは持たないよ。」

「隣の苗字は、坂上と云ふんですね。」

「さうだ、坂上昇と云ふんだ。」

「奥さんは無いやうですね。」

「五六年前に死なれた限り、貰はれないのだ。」

「幾歳になるのですか。」

「五十九だとか聞いて居るが……。」

「ぢやア、後妻を貰ふ年齢でも無いぢやありませんか。」

「併し田中伯の如な人もあるからな。」

小島は恚う云つて、莞爾した。

折柄、買物に出掛けて居た叔母が戸外から歸つて來た。

「美味さうだから、買つて來ましたの。」

と、云ひながら、柿を盆の上に乗せて持つて來た。

「高七さん、食りませんか？」

「僕は止ませう……、若し體に障ると不可ませんから……。」

「二つ位可いだらう……己は是れが好物でな。」

と、小島は美味さうに食べ始めたので、高七もつい手を出す氣になつた。

「私ね、今お隣の文子さんに會ひましたの。」

と、叔母は柿を食べながら、小島に話し掛けた。

「さうか。」

と、小島は無難作な返事をした。

「何時見ても、眞個に綺麗な娘ですことね、私何處かへ世話をして上げやうか知ら
……………」

「那麼ことは止した方が可いよ。」

「オヤ、何故ですか。」

「今己れは一本参つて来たのだ。」

「何うしてやす。」

「實はな、高七が文さんを嫁に貰ひたいと云ふので、今坂上さんに其の話しをして
来たのだ。」

「高七さんの……………夫れは宜しうございませう。器量は可し、心だても可いのです
からね。それで何うしました。」

「ところがだ、金満家は御免蒙ると云つて、お断りさ。」

「坂上さんは彼云ふ方だから、さうかも知れませぬ、貴郎金満家だなど、仰有ら

なければ可かつたのにね。」

「夫れがさ、媒介人口としては無くつてもあると云ふのが當世だ。夫れがあるから
あると正直に云つた譯さ。」

「夫れは人によつて、御座いますよ。貴郎の如な方は一體媒介人には向ませんよ。」
「さうかな。」

「何うでせう叔母さん、貴女一つお骨を折つて頂けませんか。」

と、此の時高七が口を開いた。

「さうですね、私一度文子さんに會つて心持ちを聞いて見ませう。」

「何卒、是非お願ひ致します。」

高七は叔母の力で此の縁談が纏つたら、此の叔母に對しては何物を供すること
も
敢て辭せないと思つた。

二九 やり手

叔母は、名をお磯と云つて、料理屋の娘であつた。

小島も今でこそ大した貯へはないが、若い頃には親譲りの資産が相當にあつたので、時々お磯の家へ遊びに来て、何時も二三人の藝者を招んで大陽氣に騒いで居た。さうして居る中に、何時の間にか小島とお磯は出来合つて、二人の間には子供まで出来て仕舞つた。

二人が夫婦になつた時には、小島の財産は最う半分程減つて居た。

お磯は、料理屋の娘だけに、口前は上手かつた。そして慾の皮も可成り突張つて居た。何うかして文子を高七に世話をしたい、さうしたら高七だつて五十や百のお金は包むだらうと考へた。

お磯は其の後袂を膨らませては、ちよいちよい坂上の家へ遊びに出掛けた。

或る日文子は、

「小母さんの處へ来て入らつしやる方は、何處の方なのです。」
と、お磯に尋ねた。

お磯は締たと思つた。

「彼れは小島の甥で大野高七と云ふのですよ。横濱に立派な家があるのですが、病氣でね静岡へ轉地療養に參つて居りますの、本年二十八ですが却々やり手でしてね父親から三萬圓程の財産を譲り受けたのです。此處五六年の間に五萬圓からに仕たのですよ、まだ獨身ですがね、至つて親切な男ですから、嫁になりたいと云ふ女は澤山あるのですが、何うも本人の氣に入る女がなくて困るんですよ。」

文子は、

「さうですか。」

と、云つたばかり、話しを轉じて仕舞つたので、お磯は聊か張合を抜したが、他の話しが途切れるとまた、

「近頃の若い女の方は、學士でなければお嫁に行かないとか何とか云つて、肩書きにはばかり惚れて仕舞ひますがね、お金がなくなつちや駄目ですよ、起きるも轉ぶもお金の世の中ですものね。」

「眞個にさうでございますわね。」

と、文子は相槌を打つた。

「ですから文子さんも、肩書きなんぞに惚れないで、お金持ちの處へお嫁に入らつしやいよ、貴女の如な可いお器量の方は、甚麼處へだつて嫁けるんですものね。」

「嫌な小母さん………那麼に煽動たつて何も變りませんよ、オホ、ホ、ホ。」

「煽動のちやありません、眞個ですよ」

「さう………何うも有り難う小母さん………」

と、文子は莞爾した。

三〇 落花流水

其の後文子も折々小島の家へ遊びに行くやうになつた。

始めのうちはお磯や小島とのみ話して居た文子も、仕舞には高七とも話しをするやうになつて來た。

けれども文子は、未だ高七に對して何等の野心はなかつた。恁麼男を良人に持ちたいとも思はなければ、また嫌な男だとも思つて居なかつた。

「高七さん、今のうちに手に入れて仕舞はないと駄目ですよ。」

お磯は恁麼ことを云つて居た。

或る夕方高七は散歩に出掛けた途中、バツタリ文子に會つた。

「アラ何處へ入らつしやるの………」

と、文子から口を開いた。

「僕散歩なんです、貴女は……。」

「さう、妾もブラ〜此處まで参りましたの。」

「貴女も御散歩ですか……御用がなかつたら其の邊まで御一緒に如何です……。」

「……………」

「夫れ共何か御用があるのですか？」

「いえ、別に……………」

「では可いちやありませんか……………」

「ですけれど妾……………」

「僕と一緒にではお嫌なんですか。」

「アラ、さうぢやないんですけれど……………」

「ぢや入らつしやいな、可いでせう。」

「でも人に見られますと……………」

「淋しい處を行けば可いちやありませんか、ねえ文子さん、参りませう。」

「では其の邊まで……………」

と、文子は高七の後に續いて師範學校の横の、淋しい道へ來た。

秋の夜風は身に染みて寒かつた。

「文子さん！。」

と、高七は口を開いた。

「ハ……………」

と、文子は小さく答へた。

「ねえ文子さん、僕お願ひがあるのですけれど……………」

「何う云ふことなので御座います。」

「さう改まつて仰有られると困るんですが……………ねえ文子さん、甚だ突然で何です

けれど、貴女は僕の妻となつて頂くことは出来ませんでせうか……」

「……………」

文子は顔を眞紅にして俯向いて了つた。

「え、文子さん、貴女が若し承諾して下さつたら、貴女が僕の妻になつて下さつたら、僕は貴女に對して何事も辭さなさいです、ねえ文子さん、何卒御返事をなすつて下さい。」

と、堅く文子の手を握つた。

「アッ……」

と、云つたが、文子は強て其の手を振り拂ひもしなかつた。

「妾……妾の一身は父に任せてありますので、妾の一存で御返事を申し上げることは出来ませんから、何卒父にお話しを願ひたう存じます。」

「お父さんが御承知下されば、貴女に御異存はないのですか。」

「えへ。」

高七は文子の父が此の結婚を承知しない事は、いつぞや叔父から交渉して貰つた結果によつて分つて居る。何とかして父親を承諾させる方法はないかと考へた。

併し急には名案も浮ばないので、叔母の智恵を借りる事に仕様と覺悟を定めた。

「夫れでは何れお父さんにお話しする事にしますから……………」

「何卒さう遊ばして……………」

高七は叔父を介して、文子の父親に結婚を申し込んで拒絶された事は、文子には話さなかつた。

周圍は次第々々に闇黒の幕に包まれて、空には星が冴えて來た。

「遅くなりますから、妾お先へ失禮致しますわ。」

と、文子が云ふと、

「僕も歸ります、御一緒に参りませう。」

兩人は肩と肩が擦れ合ふまでに接近して歩いた。

三 黄金の光

高七は散歩から歸ると、叔母のお磯に向つて、散歩の途中文子に逢ひ本人の意中を尋ねたところ、父親さへ承知なら本人に於て異存が無いと云つたことを物語り、「何うでせう叔母さん、何とかして父親を承諾させる事は出来ないでせうか。」と、相談して見た。

お磯は、

「さうですわえ。」

と、暫く考へて居たが、

「本人さへ其の氣で居るのなら、大概大丈夫ですよ、妾から坂上さんに盲く話して見ますから妾に任せて置きなさい。」

「何卒お願い致します。」

高七は此の結婚が最う成立したやうな氣がして、種々と空想に耽りながら、其の夜は眠りに就いた。

翌日文子は小島の家へ遊びに来た。

高七と文子は、昨夜以來非常に接近して、二人は隔てなく話し合つて居た。

文子さん甚だ失禮ですけれど、何うぞ是れを納めて下さい、新しいのを買ふと可いんですけれど、静岡には碌なのがありませんからね。」

高七は憊う云ひながら、嵌めて居た寶石入りの指環を抜いて文子の前に置いた。

文子は再三辭したのであるが、高七が是非にと云ふので、文子は遂に納める事にした。

「貴女の指と僕の指と、さう違はないやうですから、大概宜からうと思ますが、鳥渡嵌めて見て下さい。」

と、高七に云はれて、文子は左手の薬指に嵌めて見て、

「丁度宜う御座いますわ。」

と、莞爾した。

此の時お磯は、

「大分お睦まじう御座いますね。」

と、云ひながら、コーヒーを運んで来た。

「アラ、嫌な小母さん……。」

と、文子は耳朶まで紅くした。

お磯は不圖文子の左手の薬指に目を注げて、

「アラ文子さん、其の指環を高七さんからお貰ひになつて？」

「えい。」

と、文子は極り悪さうに云つた。

「可い事をなすつたのね、其の指環は何ださうで御座いますよ、アノ天賞堂で三百圓とか致したのださうですよ……ねえ高七さん……。」

高七は笑ひながら頷いた。

文子は、

「まア……。」

と、目を光らせて、今更ながら指環を眺めた。そして文子は恁麼事を心の中に思つた。

「妾を愛して呉れよばこそ、三百圓もする指環を惜氣もなく呉れたのである。斯く

まで愛して呉れる男を良人としたならば、將來は甚麼に楽しい事であらう……。」

黄金の光は深く文子の心を麻痺させて、例令父が何と云つても構はない、妾は此

の人と苦樂を共に仕やうと考へた。文子は聽て来る可き悲惨な運命を豫期する事が

出来なかつたのである。

三三 其の證據

其の日の午後、お磯は昇に會つて文子を是非高七の嫁に呉れと迫つたが、
「私や金満家が嫌ひぢやでの、折角ぢやがお断りしますぢや。」
と、跳ね付けた。

「そりやね貴下の御氣性として、幾ら金があつても本人に望みがなかつたら仕方が
ありませんが、慥う申しちや何ですが甥の高七は、横濱でも寝め者になつて居る働
者ですから、文子さんの將來に決して悪いやうな事は御座いません、文子さんだつ
て、さう／＼何時迄もお獨りでお置きになる譯にも參らないでせうから、是非ね、
御承諾なすつて下さいませんか。」

「今も云ふ通り、折角のお話しぢやが、此の事だけはお断りぢや。」

「夫れでは坂上さん、文子さんがお可哀相ですよ。」

「何故ぢやな。」

「でも文子さんと高七とは、最う堅い約束が出来て居るんですよ。」

「エツ、また那麽事を爲居つたか………」
と、昇の目は光つた。

「またと仰有ると………」

お磯は不思議に思つて慥う尋ねた。

昇は夫れと氣が付いて、

「イヤ、まだ那麽事をするには早すぎる………」

と、急いで打ち消した。

「那麽事は貴下、早いも遅いもあつたものぢや御座いませんよ、妙齡になりますと
兎角ね………」

一度ならず二度迄も、親の許さぬ事をする………彼奴は何故さう男が戀しいのか

と、昇は文子の行爲を情なく思つたが、上部は夫れとなく、

「文子に限つて那麽事はあるまいと思ふんぢやが……貴女夫れは事實かの……。」

「何で貴下嘘なんか……其の證據には高七が、三百圓もする指環を文子さんに上げてあるのですよ。」

「那麽事まで爲居つたですか……。」

「ですから坂上さん、出来て仕舞つてからは仕方がありませんから、是非二人を夫婦にさせて下すつては如何です、若し恁麽事が世間へ知れますと、文子さんは無論の事、貴下のお顔にも關はるのですからね。」

「分りましたぢや、兎に角一應考へた上で、御挨拶致しませう……。」

「何卒ね、可い鹽梅に参りますやうな事にお願ひ致します。」

お磯が歸つた後で、昇は文子を居間へ呼び寄せた。

「文！ 貴様は一體何う云ふ考へで居るのぢや、一度ならず二度までも親の顔へ泥

を塗り腐つて……。」

「突然に那麽事を仰有つても、妾には少しも分りませんが、何う云ふ譯なんで御座います、ねえお父様。」

昇はキツと文子の左手の指に目を注いで居たが、

「何う云ふ譯……貴様は可くさう云ふ白々しい事が云へたものぢや、コレ、貴様の指にある其の指環は一體何うしたのぢや。」

「エッ。」

文子は右の手で指環を押へて、

「是れはあの、何で御座います……。」

「何うしたのぢや。」

「あの……貫ひましたので……、ねえお父様！ 妾お願ひがあるのです。」

と、文子は急に改まつた。

昇は夫れには答へないで、

「貰つた……誰に貰つたのぢや。」

と、文子の顔をキツと贖めた。

三三 思ひの外

文子は父の權幕が恐ろしいので、一時躊躇つたが、

「小島さんに居らつしやる、大野さんに頂いたので御座います。」

「何の爲めに貰つたのぢや、また其の男と私通腐つて貰つたに違ひない。」

「お父様！ 那麼人聞きの悪い事を……、妻はお父様さへ御承知下すつたら、結婚しませうとお約束は致しましたが、其の外に淫な關係は御座いません。」

「宜し分つた、最う云ふな乃公も云はん……」

昇は口を噤んだ。

文子は穢れた女である。子供迄生んだ女である。立派な處へ嫁がせる事の出来ない女である。と云つてまた大野のところへは嫁りたくない。お磯の話では人助けの爲めに金貸しをやつて居ると云つたが、五年間に二萬圓も儲けたと云ふ話だから屹度高利貸しに違ひない。娘を高利貸の妻にしたくはないが、今此の縁談を斷つた處が、心の腐つて居る女の事であるから、また甚麼男と關係するか分らないと思ふと、一層此の結婚を承諾しやうと覺悟を定めた。

此の時文子は、

「お父様、お願いがあります。」

と、また云つた。

「何だ。」

「大野と妻との結婚を何卒お許し下さいまし。」

昇は心を定めた折柄であるから、少しも躊躇せず、

「宜しう。」

と、答へた。

文子は雀躍せんばかりに喜んで、

「エッ、お許し下さいますの？」

「許してやる。其の代り貴様は勘當するぞッ。」

「マア……………」

と、文子は一時驚いたが、直ぐ、

「已むを得ません……………」

と、小さく答へた。

「例令甚麽事があらう共、決して實家へ来る事はならんぞ。」

「ハイ。」

「分つたか。」

「可く分りました。」

昇の目は潤んで居た。文子も流石に泣かすには居られなかつた。

慙くして高七と文子との結婚は成立したのである。

結婚後一年程は文子は非常な幸福の日を送つたが、濱子を生んで以來、其の容色が衰へると、高七の愛も次第に衰へて來た。

高七は近頃になつて屢々家を空けるやうになつた。

高七がさうなつたのも、お前の待遇が悪いのだと、其の度毎に文子は姑から小言を云はれた。文子は何より夫れが辛かつたのである。

高七は非常な嫉妬家であつた。文子が店の番頭と笑ひながら話して居てもして居やうものなら大變である。夫れが爲め文子は蹴られたり叩かれたりした。

文子は今更ながら後悔したが、最う追つ付かなかつた。

三四 疑惑の的

濱子の葬式を終つて後、一週間ばかりの間は何かど取り込んで居たので、高七も文子に對して香雨の追窮を中止して居たが、初七日も終つて平常にかへると、

「文、いつか諏訪で會つた男は親類の者に似て居ると云つたが、一體それは誰なんだ。」

と、また改めて尋ねたのである。

けれども文子は遂々明瞭した答はしなかつた。

高七の文子に對する態度は、愈冷酷になつて來た。或日高七は文子が二千圓を投じて展覽會で買求めた天女の額を熟々と目成つて居たが、其の天女が文子に酷似て居るのに氣が付いた。

「事によると、是れを書いた香雨と文子との間に、何等かの秘密があるんぢやない

か知らん……」

と、考へると落着いては居られなかつた。

高七には薰山と云ふ洋畫家の知人があつた。香雨と薰山とは未だ名も知られない時分からの朋友であると聞いて居たので、香雨の事は薰山に尋ねたら必ず様子が分ると思つたから、高七は早速薰山を訪れる事にした。

薰山は其の頃大久保に寓居して居た。

「僕が今日來たのは、君に是非聞きたい事があるんだよ。」

と、云つたのは高七である。

薰山は落着いた調子で、

「夫れは何う云ふ事かね。」

「君は香雨と云ふ畫家とは以前から朋友だと云つたね。」

「そりや云つたかも知れない、僕と梅村君とは舊い朋友だからね。」

「それで、香雨の事については、何もかも知つて居るだらうね。」

「大概の事は知つて居るよ。それが何うしたと云ふのだね。」

「外ではないが、其の香雨と云ふ男は、以前女に關係した事はなかつたかね。」

「那麼事を聞いて君は何うするのだ。」

と、薫山は不思議さうな顔をした。

「少し調べて見たい事があるのね。」

薫山は平素、自分の腕は香雨より勝れて居ると自信して居たにも拘はらず、此の春の展覽會に香雨の繪は一等賞を得たのに、自分の繪は入賞する事さへ出来なかつたので、小人の常として香雨を羨むのあまり、なにかと香雨の悪口を云つて居た。

さう云ふ行掛かり上、薫山は今、高七に香雨の事を尋ねられて、黙つて居る事は出来なかつたのである。

「そりやあつたよ、餘程以前の事であつたが、女子大學の生徒と情を通じて子供迄

出来たものだから、女は中途で學校を廢して中根岸へ世帯を持つたがね、女の父親

が不承知であつた爲め、正式の結婚が出来ず、遂々女は父親に引き取られ、其の後女から何の消息もないものだから、香雨が非常に怨んで居た事があつたよ。」

「して其の女は何と云ふ名だつたね。」

「文子とか云つたよ。」

「エッ、文子……。」

高七の顔色は見る／＼變つた。

「君の知つてる女かね。」

と、薫山は高七の様子の変つたのを見て、恚う尋ねた。

「いや……別に…….として其の文子の父親は何をして居る人だね。」

「静岡の人で、後備の海軍大佐だと聞いたが、名は知らないよ。」

「さうかね、いや有り難う……。」

是れだけ聞けば最う大丈夫と、高七はそこへ、薫山の家を辭した。

三五 離縁

薫山の家を辭した高七は、怒氣を滿面に現はして歸宅した。

「お歸り遊ばせ……………」

と、迎へに出た文子には目も呉れず、サツサと母親の居間へ這入つて、暫く何事か話して居たが、聽て……………」

「文……………文……………文……………」

と、續け様に呼んだ。

形勢不穩と見て取つた文子は、

「ハイ。」

と、柔しく返事をして、しとやかに良人の前へ來た。

夫れと見ると高七は、

「文、貴様は實に不埒な奴だぞツ。」

と、文子を瞰み付けた。

「何か不調法でも……………」

「不調法處の詮議ぢやない、き……………き……………貴様は香雨と云ふ男を知つてるだらう……………」

恚う云はれて文子はギョツとした。何と返事をしたものかとドギマギした。

「諏訪で會つた男は、親類の者に似て居ると思つたとか何とか胡魔化したか、乃公はチャンと察して居たのだ。彼の男が香雨と云ふ書家だらう、貴様が以前關係して子供まで拵へた可愛い男に違ひないのだ。」

文子は俯向いた儘返事をしなかつた。

「宜くも貴様は今迄乃公を馬鹿にしたな、最う乃公は貴様の顔を見るのも嫌だ、出

て行け、直ぐ出て行けッ。」

と、高七は文子を突き倒した。

「お前那麽亂暴はしない方が可いよ、若し怪我でもされると夫れを可い事にして、甚麼難題を云ひ掛けるか分りやしない。」

と、母親が口を出した。

「何に構やしません、心配する事はないです。」

「何うせ離縁をする女だから、まあく柔順にした方が可い。」

と、煙草を輪に吹いた。

母親は文子には何事も云はなかつた。

「文、貴様は今改めて離縁をしたからさう思へ。」

恚う云つて高七は、此の部屋を出て行つた。

文子は姑に向つて、

「お母さん、妾が悪かつたのですから……。」

姑は皆迄聞かす、無言の儘立ち上つて、座敷の方へ行つて仕舞つた。

文子も最う決心して、其の日の夕刻大野家を出た、自分の死に場所と定め、殊に

十有餘年間起臥した此の家を去る時には、流石に文子も可い心持ちはしなかつた。

三六 學校友達

大野家を去つた文子は、一先づ東京の友の家へ厄介になる事にした。

昇は五年前に死んで、兄の廣は裁判官を辭して今静岡に公證人となつて居るが、

今更文子は兄の家へ歸る事は出来なかつたのである。

友の名は初江と呼んで、其の良人の松山英雄は海軍中佐である。英雄は大尉時代

昇の部下であつて、英雄は昇の爲めに一方ならぬ恩恵を受けたので、夫れを非常に

徳として、昇が後備に編入されて静岡へ歸つてからは、時々書面を送つて安否を尋

ねて居た。

初江は良人の恩人の娘として、また自分の友として、文子に同情を寄せて居た。文子は初江の家へ厄介になつた當時は、多少の蓄金もあつたので、初江の子供に折々色々な物を買ひ與へて居た。

初江には芳子と云ふ十六になる女を頭にして、三人の子があつた。文子は芳子を見る度に馨の事を思ひ出して、逢ひたくて堪らなかつた。

或る土曜日のこと、芳子は學校から歸ると、

「阿母様、妾是れからお友達の處へ遊びに行つて來ても、可う御座いますか。」

初江は茶の間で文子と話しをして居たが、

「お友達つて誰なの。」

「梅村さんの處です。」

「さう、早くお歸りなさいよ。」

「えい。」

芳子は出て行つた。

梅村と聞いた時に文子の胸は轟いた。けれども同姓は幾らもある、香雨ばかりが梅村ではないと思ひ直したが、文子は何となく其の名前を聞きたいと思つた。

梅村さんつて何う云ふ方なの。」

と、文子は尋ねた。

「芳子の學校友達でね。仲が可いものですからね、時々行つたり來たりして居ますの。」

初江は、文子が以前香雨と關係のあつたことは知らなかつた。無論其の間に子供があらうなどは夢にも知らないのである。

「さう、妾が御厄介になつてから、一度も見えた方ぢやないのですわね。」

「此の頃久しく見えませんから、文子さんは御存じないかも知れませんが、芳子より

「一歳上だなんさうですがね、眞個に器量が可いのよ。」

「夫れでも芳子さん程ではないでせう。」

「嫌な文子さんね、芳子などは比べものになりませんわ、今度來たら御覽なさいよ女でも惚れくしてしましますわ。」

「那麽に別嬪なの。」

「え、こ。」

初江は文子の顔を瞞めて居たが、

「まア不思議だわねえ。」

と、ヂツと瞞めて、

「妾、今氣が付いたのよ。」

「何うしたの？ 那麽に妾の顔を見ては嫌ですよ。」

「眞個不思議ねえ。」

文子は何が何やら、理由が分らないので、

「何が那麽に不思議なの。」

「だつて不思議ぢやありませんか、幾ら他人の空似だと云つても、恁麼に可く似た人があるかしら……。」

「妾が誰かに似て居るとでも仰有るの。」

「え、其の梅村の娘がね、文子さんに酷似なんですもの、親子だと云つても可くらゐですの。」

文子は何となく、其の娘が馨のやうな氣がしてならなかつた。

「夫れは一體何處の娘なの。」

「梅村香雨と云ふ、書家の娘でね。馨さんと云ふのです。」

「エッ。」

見る／＼文子の顔色は變つたのであつた。

三七 物語り

文子は、今では最う隠すでもないと思つたので、以前の事を詳しく初江に物語つた。

「ねえ初江さん、妾一度馨に逢ひたいのですけれど、何うかして逢ふ事は出来ないのでせうか。」

「逢へない事はありませんわ、芳子に話しさへすれば屹度連れて参りますよ。」

「ぢや貴女から、芳子さんに話して下さいませんか。」

「え、話して見ませう。」

「妾が馨の母だと云ふ事は、仰有らないでね。」

「那麽事を云ふものですか、夫れとなく遊びに来るやうに云はせますわ。」

「何卒ね。」

梅村へ遊びに行つた芳子は、三時頃に歸つて来た。

「梅村さんがね、明日遊びに行くと云つてましたわ。」

「さう……。」

と、云つて初江は、文子と顔を見合せた。二人は口にくそ出さなかつたが、腹の中では丁度可い鹽梅だと思つた。

初江は、文子が定めて馨の様子を知りたい事であらうと思つたので、色々な事を芳子に尋ねて夫れとなく文子に聞かせる事にした。

「梅村さんは久しく見えなかつたけれど、別に變つた事はないのかね?。」

「え、相變らずですわ。」

「お父さんもお母さんも、お宅に居らしつて?。」

「え、梅村さんのお父さんは眞個に可い方よ、そしてね面白い事ばかり仰有るの妾随分笑つたわ。」

「さう……、甚麽事を仰有つて……」

「妾にね、甚麽事を仰有るの……芳子さんは兄弟が何人あるとお聞きになりましたから妾、三人ですと云つたのよ、するとまた男か女かとお聞きになるのよ、皆な女ですと云ふと、夫れは不可、幾らお父さんが海軍の軍人だからと云つて、さう軍艦ばかり製造しないで、偶には陸軍の大砲も拵へるやうに、お母さんに云はないと不可ない……て仰有るのよ。」

「まア、那麽事を……」

と、初江は笑つた。文子は中根岸當時の楽しい生活を、思ひ出さずには居られなかつた。

芳子はまた口を開いて、

「そしてね、甚麽事も仰有つたわ……芳子さんも最う徐々欲しくなるね。妾には何の事だか分らなかつたので、何がですと伺ふと、お婿さんが……つて仰有るん

でせう、妾眞紅になつたわ、妾那麽事知りませんと云ふと、知らない方が可い、芳子さん、決して自分の一丁見でお婿さんなど極めては不可ませんよ、御両親が定めて下さつたお婿さんでないよ、仕舞ひには碌な事がないですからね……恁う仰有つたの、妾きまりが悪かつてよ。」

文子は自分の事でも云はれたやうな氣かして、思はず頸を垂れて了つた。

三八 落 膽

翌日になつた。今日は馨が來ると云ふので、文子は何となく心が落着かなかつた。

けれども馨の姿は、十一時を打つても見えなかつた。

「梅村さんは何うなすつたんでせう。」

と、芳子は待ち飽ぐんで居る。

「真個にね、最う見えさうなものだね。」

と、初江も待ち兼ねて居た。

文子は口にくそ出さないが、

「何うしたのだらう。来ないのかしら……」

と、気が気でなかつた。

「妾、迎ひに行つて来やうかしら……」

芳子は門口を出たり這入つたりした。

「大方晝過ぎに見えるのでせう。」

「だつて、何時でも晝前なんですよ。」

聽て十二時を打たうとする頃、一人の男が書面を持って来た。

受け取つた芳子は

「アラ、梅村さんからだわ。」

云ひながら封を切つて讀み下した。

「お母さん、梅村さんはね、今日来られないんですつて……」

「さう……御用でも出来たのでせう。」

「いゝえ、昨夜から急に熱が出て、起きて居られないんですつて……」

「それは不可ないね。」

慙う云ひながら初江は、氣の毒さうに文子の顔を見た。

文子は落膽して了つた。久し振りで我が子に會へると喜んだ嬉しさは、病氣と聞

いて悲しさに變つて了つた。

「晝から妾、お見舞に行つて来ませうかしら……」

「さうなさいよ。」

芳子が書齋へ這入つた後で、

「梅村の宅は、遠方なんですか。」

と、文子は初江に尋ねた。

「さう遠くはありませんの、湯島の天神様の傍なんですから。」

松山の家は本郷の區役所の裏であるから、文子は成程さう遠くはないと思つた。
「生憎でしたわねえ、文子さん落膽なすつたでせう。」

「ですけれど病氣なら仕方がありませんわ。」

文子は憊う云つたが、何となく物足りないやうな氣がした。

一時頃に家を出た芳子は、二時間程経つてから歸つて來た。

「梅村さんの病氣は何う……。」

と、顔を見るなり初江は尋ねた。

「大した事はないやうです、風邪だらうつて小母さんも云つてらつしやいましたわ。」

「さう……。」

夫れを聞いて文子も安心した。

三九世の義理

次の日曜日に馨は芳子の家へ遊あそびに來た。文子は一時馨に會ふのを避けて、一問
で夫れとなく様子を聞いて居た。

「梅村さん、最う御病氣は宜しいのですか。」

と、初江が尋ねた。

「え、お蔭様で……。」

と、云つたのは馨である。

「夫れは結構でした事、陽氣が悪いですからお氣をつけなさいよ。」

「え、有り難う御座います。」

本年十七になる馨は、以前と違つて光るやうな美人になつて居た。

こつそり馨の姿を眺めた文子は、我子ながら思はず其の美しさに、暫く見惚れて居たのである。

初江は何事か云ひ掛けて口籠つたが、

「梅村さんお母さんは、お變りはありませんか。」

と、何気なさうに尋ねた。

「え、別に變りは御座いませんの。」

「さうですか、それは何よりです事ねえ、今日はね梅村さん、貴女を喜ばせて上げる事があるのですよ。」

「さう……甚麽事小母さん……。」

「最う少し経つてからにしませう……芳ちゃん、梅村さんにお菓子でも取つてお上げなさいよ。」

「え。」

芳子は菓子鉢の、カステラを紙に取つて、

「梅村さん美味くはありませんが、食がつて頂戴……。」

と、馨の前に置いた。

「え、頂きますわ。」

馨は、初江の云つた貴女を喜ばせて上ると云つた事が、氣になつて堪らなかつた。

「小母さん、妾を喜ばせると先刻仰有つたのは、甚麽こと……。」

と、尋ねた。

「お母さん、早く話してお上げなさいよ。」

と、芳子が口を添へた。

「梅村さんは眞個のお母さんに逢ひたいとは思ひませんか。」

突然であるから、馨は鳥渡驚いたが。

「妾を生んで間もなく別れて了つて、顔も知らないんですから、妾逢ひたいと思

ひませんの……。」

愆うは云つたが、馨の目には涙が浮んで居た。

是れを一間で聞いて居た文子は、

「馨、妾が悪かつた許してお呉れ。」

と、心で云つて、思はず襦袢の袖で兩の目を押へた。

「梅村さん眞個に逢ひたくありませんか。」

と、初江は馨の顔を覗き込むやうにして云つた。

「夫れはね小母さん、妾だつて偶には逢ひ度いと思ふ事はあるんですけど、眞個の子のやうにして貰つて居る今の母に對して、那麽事を思つては濟まないと思へましてね、最うすつかり断念めて居ります。」

「けれども若し眞個のお母さんが、貴女に逢ひに入らしつたら、何うなさいます。」

「妾、逢ひませぬわ。」

「何故です……。」

「今の母に濟みませんもの……。」

初江は、随分義理堅い娘だと思つた。

四〇 知らぬ母

初江は、馨が義理堅い事を云つて居るけれど、目の前へ文子が来て、

「妾がお前を産んだ母です。」

と、云つたら甚麼に喜ぶ事であらうと思つたので、

「芳ちゃん、小母さんにお茶が注ぎましたから、入らつしやいと呼んで来て頂戴。」

「ハイ」

芳子は次の間へ行つて、文子を伴つて来た。

文子は、

「オ、馨！」

と、云つて直にも抱へたいのをヂツと我慢して、初江の傍に坐つたが、胸には波を打つて居た。

馨は鳥渡文子の顔に目を移して、無言の儘丁寧にお辭儀をした。

「可く入らつしやいましたのね。」

と、文子は懐しさうに挨拶した。

初江は、

「梅村さん、此の方知つて居らして？」

「いゝえ。」

と、馨は頸を振つた。

初江は自分の生みの親を知らぬ馨を氣の毒に思つた。

「梅村さん……………」

と、初江は改めて呼んだ。

「ハ……………」

「貴女は坂上文子と仰有る方を御承知でせうね。」

「ハ……………夫れは妾の、生みの親で御座います。」

「其の文子さんは、此のお方ですよ。」

「エツ、そんなら眞個のお母さん……………」

と、馨は思はず膝を進めた。

「オ、馨ちゃん……………」

と、二人は身を寄せて、抱き合ふばかりであつたが、何と思つたか馨は身を退いた。

「梅村さん、久し振りでお母さんにお逢ひになつたのですから、妾どもに御遠慮は入りません、お緩りとお話しをなさいまし。」

と、初江は芳子を促して席を外した。

馨はたい俯向ひて居るばかりであつた。
文子は馨に身を寄せて、

「馨ちゃん、妻はね今更馨ちゃんの母だと云つて、名乗れた義理ではないのだがね、此の頃は何うしたものか馨ちゃんが戀しくて、戀しくて仕様がな、今迄の事は許してお呉れ、そしてお母さんと呼んで下さい。」
と、ハラ／＼と涙を流した。

馨も目に露を宿らせて、

「最う過ぎ去つた事は何事も仰有らないで下さい、妻の母は家にあります、貴女をお母さんと呼ぶ譯には参りません。」

「一度で可い……一度で可いから是非お母さんと呼んでお呉れ、ね、馨ちゃんお願ひです。」

馨はワツと其處へ泣き伏したが、聽て涙を拂つて、

「許して下さい……妾し今の母に濟まないのですから……妾お暇を致しますわ。」
と、立ち上つた。

「馨ちゃん……夫れはあんまり……」
と、文子は引き止めた。

此の有様を見た初江は、再び座へ戻つて、

「梅村さん、貴女は實のお母様が戀しくありませんか、貴女は女なんでももの、男の如に那麼強い事を仰有らないで、柔しのお言葉を掛けてお上げになつても可いでは御座いませんか……」

けれども馨は聞き入れなかつた。そして遂々歸つて了つた。

四一 苦學生

今日しも香雨は、某家の園遊會に招かれての歸途、吾妻橋のビール會社の前から俥に乗つた。

「何處へ参るので御座います。」

「湯島まで……………」

「ハイ、承知致しました。」

車夫の言葉は丁寧であつた。そして俥の曳き方も丁寧であつた。言葉の丁寧なのは可いが、曳き方の丁寧なものには香雨も閉口したので、

「オイ車夫、早くやつて呉れ。」

「ハイ……………」

けれども俥の進み方は、相變らず遅かつた。

吾妻橋の處へ來た時に、車夫は橋を渡らうとしたので、

「オイ、厩橋を行つた方が近いぞ。」

「左様で御座いますか。」

「お前はまた東京の地理を可く知らないね。」

「ハイ、田舎から出て参りましたばかりなんです。」

「左様か、道理で……………國は何處だ。」

「信州の諏訪で御座います。」

「諏訪……………さうか。」

「貴下御承知で入らつしやいますか。」

「知つてるよ、僕の爲めには紀念の土地だ。」

「貴下も信州で居らつしやいますか。」

「いやさうぢやない。」

厩橋附近へ來た頃は、車夫の呼吸は如何にも苦しさうであつた。

「お前は何時から車夫になつたのだね。」

「まだ一週間程にしかありません。」

「一週間……さうか、大分苦しいやうぢやないか、無理に我慢して行かないでも可い、僕は此處で下りるから。」

「何、大丈夫です。」

香雨の俵が厩橋を渡る迄には、後から来る俵に五六度追ひ越された。

「慣れないものですから、遅くて済みませんです。」

香雨は車夫の態度や、言葉使で、普通の車曳でないと思つたので、

「オイ車夫。」

「ハイ。」

「お前は未だ若いやうだが、俵など曳かないで他に職業はないのか。」

「私も恁麼事は致したくありませんが、東京は始めての事でありまして、知人もないものですから、他の職業を求める事が出来ません、止むを得ず車夫となりました。」

「さうか、東京へは何か目的があつて来たのかね。」

「ハイ。」

「甚麼目的だ。」

「實は……止ませう……。」

「止さなくても可いちやないか、話して見給へ。」

「勉強に來たのです。」

「勉強……苦學するんだね。」

「ハイ。」

「餘程堅い決心を持たんと、苦學ぢや成功せんよ……、して學校は何處だね。」

「早稲田の文科です。」

「さうか、まア一生懸命でやり給へ。」

「ハイ、有り難う存じます。」

俵が下谷竹町へ来た時に、提灯の火が消えて了つた。

「ヤ、しまつた……濟みませんが、暫くお待ちを願ひます。」
と、轆棒を下して、提灯の吊りを緩めた。

「こりやア閉口した、蠟燭がない……鳥渡其の邊で買つて参りますから。」
と、車夫は駆け出して行つた。

香雨は時計を電氣の光りに透して見て、

「驚いたな最う十時だ、普通の俵の三倍も掛かつて居る、今更他の俵に更へるのも氣の毒だし、此の分では十二時頃でないの家へは歸れない。」
と、囁いた。

「何うもお待ち遠様でした。」

と、車夫は蠟燭を手にして飛んで来た。

マツチを擦つて、蠟燭に火を點する時、香雨は始めて車夫の顔を明に見る事が出

来た。そして何處かで見た様な男だと思つた。

四二 後ろ影

香雨は暫く考へて居たが、漸く思ひ出して、

「君は川島君ぢやないか。」

「エッ。」

車夫は驚いて、香雨の顔を熟視した。

「オ、梅村先生でしたか。」

「矢張り川島君だつたね、今迄少しも氣が付かなかつたので失敬した。」

「私も存じませぬものですから、失禮を致しました。」

此の車夫は、信州の諏訪湖で馨を助けた、其の當時の中學生川島清一であつた。

「川島君と知つたら、娘の恩人の俵に僕が乗る譯にも不可。」

と、香雨は俥を下りた。

「先生、那麽事は構ひませんからお乗り下さい。」

「なアに可いよ、心配して呉れ給ふな。時に君は今何處に居るのだ。」

「早稲田の鶴巻町に居ります。」

「早稲田から本所迄、毎晩客待ちに出るのかね。」

「さうぢやありません、毎晩神樂坂下へ出るので、今日は客を乗せて向島迄来た歸り途、ビール會社が大分賑かでしたから、彼處で客待ちをして居りましたのです。」

「君に色々話したい事があるのだが、是れから僕の家へ来て呉れないか、俥は何處かへ預けて置くさ、電車で行つた方が早いからね。」

「ですけれど、折角此處まで来たのですからお乗せして参りませう。」

「俥はもう可いよ、何處かへ預ける處はないかしらん。」

「それでは僞う云ふ事にして頂きませう、私は此處でお暇を願つて、明日學校の歸りにお尋ねする事に致します。」

「夫れでも可いがね、學校の歸りは何時頃になるかね。」

「四時頃です。」

「ぢや明日歸りに来て貰ふ事にしやう。」

「屹度伺ひます、先生のお宅は湯島の何の邊です。」

「さうだ名刺を上げて置かう。」

と、香雨は清一に名刺を渡して、

「天神の傍だから、直ぐ分るよ。」

「さうですか。」

「では賃金を渡して上げる。」

香雨は一圓紙幣を出して清一に渡さうとした。

「那麼に頂いては多いのです。」

「構はん、取つて置き給へ。」

「さうですか、恐れ入ります。」

清一は再三頭を下げて、紙幣を受け取つた。

「夫れでは僕、是れで失敬する、明日は待つて居るよ。」

「何うも有り難ふ存じました。必ず明日伺ひますから……」

香雨は歩き出した。清一はヂツと其の後ろ影を目送つて居た。

四三 恩の爲め

翌日清一は、學校からの歸途湯島天神町に香雨を尋ねた。昨夜の車夫姿に引き換へて、今日は飛白の着物に袴を着けて、制帽を手にして玄關に立つて居た。

取次ぎの案内で奥に通ると、

「昨夜は失敬した。可く来て呉れたね。」

香雨は莞爾して迎へたのである。

處へ咲子も出て来て、

「川島さんお久し振りでしたこと、眞個にね貴下のお蔭様で娘も命を拾つたのですから、貴下の御恩は忘れは致しませんよ。」

「彼れ位の事を、御恩など、仰有つて下さつては困ります。」

と、清一は恩々と云はれるのを心苦しく思つた。

昨夜主人が貴下にお目に掛かつて、今日入らつしやるこのことでしたから、お

待ち申して居つたので御座いますよ。」

「眞個奇遇だつたね。」

と、香雨は口を開いた。

「私も實に意外で御座いました。」

と、清一は云つた。

折柄馨が茶を運んで来た。

「入らつしやいまし、いつぞやは一方ならぬ御厄介様になりまして有り難ふ存じました。」

と、丁寧にあいさつした。

清一は、たゞ頭を下げたばかりであつた。

「時に川島君、僕相談があるのだがね。」

と、香雨は改まつて恚う云つた。

「ハ……………」

「外ぢやないがね、君が苦學で成功しやうと云ふのは、非常に困難な事でもあるしするから、僕の家へ来て居て勉強する事にしたら何うだらう、學資位の事は僕が出しても可いからね。」

「折角仰有つて下さるのですけれど、私は他人の助けを借りてまでも勉強したいとは思ひません、出来るだけの事をして不可なければ夫れまで、運命と断念めるのです。」

「他人の助けと云ふけれども、僕が學資を出すに云ふのは決して不思議ぢやないのだよ、そりや縁のない人から助力を受けると云ふ事は君も心苦しい事であらうけれど、僕は君に對して盡すべき義務がある、だから是非僕に其の義務を果させて貰ひたいのだ。」

「私が令嬢をお救ひしたのを、先生は義務として私を助けてやらうと仰有るのかも知れませんが、あんな些細な事で夫れ程までの御心配には及びません。」

「決して些細の事ぢやない、娘の一命に關る大事ぢやないか、ねえ君、是非僕の意に任せて呉れ給へ。」

清一は堅く拒んだのであるが、香雨を始め咲子も頻りに勧めるので、清一も辭し

兼ね、其の日から香雨の家へ引き取られ、早稲田へ通學する事になつたのである。

四人の心

文子は馨に母と呼んで貰ひたいばかりに、芳子に頼んで馨を連れて来て呉れと云ふので、芳子は學校で馨に、

「お母さんが、大變貴女に逢ひたがつて入らつしやるから、是非遊びに入らつしやいな。」

と、勧めたが、馨は其の後芳子の家へは行かなかつた。

文子は最う堪へ難て、毎日のやうに香雨の門前を彷徨ふのであつたが、馨に逢ふ事は出来なかつた。

松山夫婦も始めの中こそ、悪い顔もせず文子を大事にして呉れたけれど、日が経つに連れ段々厄介者扱ひにされるやうになつた、相當の賄料を拂つて世話になつ

て居る文子は、夫れが面白くなかつた。恚麼嫌な思ひをする位なら一層奉公でもした方が可いと決心して、ある日初江に、

「初江さん永らくの間、飛んだ御厄介になりましたわね、妾も何時迄恚麼事をして居りましても仕方がありませんから、一層お屋敷へでも御奉公をしやうと思ひますの。」

腹の中は兎に角、口だけでは、

「貴女、那麼事をなさらないでも、恚うして入らつしやる内には、またよいお考へが出るでせう。」

位の事は云つて呉れるだらうと思つたが、初江の返事は露出しであつた。

「さうね、そうなすつた方が可いかも知れませんが、何なら妾良人に話して可い處を探して上げますわ。」

豫期に反した初江の言葉を、文子は別に悪くも思はなかつた。最う決心して居た

からである。

「何卒お願い致しますわ。」

「承知しました。良人が帰宅つたら話して見ますわ。」

松山が歸ると、初江は早速文子の事を話した。

「其の方が可いんだ。何時迄ものそいして居たつて仕方がないからな。」

と、松山が云ふと、初江は、

「妾もね、さう思ひましたものですから、其の方が可いと申しましたの、それでね貴郎、何處かにお心當りはないでせうか。」

「乃公は桂庵ぢやないんだから、さうおいそれとは行かないよ、併し何處か聞かせてやらう。」

其の後一週間程経つてから、文子は赤坂の稻葉子爵邸へ奉公する事になつた。

四五 絞る 袂

文子が稻葉邸へ来てから一ヶ月程経つてからの事である。香雨は子爵の依頼を受けた子爵夫妻の肖像畫が出来上つたので、夫れを持って稻葉邸を訪れた。

應接間へ通つて、煙草を吸ひながら室内の買物や額面などを見廻して居ると、扉を開けて一人の婦人がコーヒーを持って来て、

「入らつしやいませ、殿様は只今直ぐにお見えになりますから……。」

云ひながら不圖香雨の顔を見て、

「オ、貴郎……。」

と、思はず進み寄つたのは文子である。

香雨も意外に驚いて、

「文さんでしたか、暫くでしたな。」

「真個にお久し振りです、御座います、貴郎も御成功遊ばしまして、妾も甚麼に嬉しいか知れませんが、いつぞや諏訪でお目に掛りました時は、お言葉を掛ける事も出来ませんで、妾甚麼に残念に思ひましたか……。」

「して貴女は何うして此の邸へ来て居られるのですか。」

「一と月程以前、御奉公に上りましたので御座います。」

「奉公に……何うして貴女奉公なんぞするので。」

「文子は往事を回想すると感慨に堪えず、思はずホロリとした。」

「自業自得で御座います、妾は今更貴郎に申譯が御座いません、馨は其後は變りはありませんか。」

「其の後……、其の後大に變りましたよ、貴女が馨を置いて静岡へ歸つてから非常に困りました。馨も亦非常に苦勞をしたのです。此の頃は幸ひ今の母が可愛がつて呉れますから、馨も幸福です。」

「貴郎、妾は一度馨に逢ひたう御座います、是非お逢はせ下さる譯には参りませんでせうか。」

「貴女が棄て行つて子供です、今更逢つて什麼なりますか。」

「お逢はせ下さる譯には参りませんでせうか。」

「不可ません、松山の處で一度逢へば澤山ぢやないですか。」

「エッ、夫れぢや彼の事を馨が貴郎に……。」

「話したです。僕は馨の心中を察すると氣の毒で堪らんです。馨だつてどれ程貴女に逢ひたいか知れんのだ、けれども馨は生の母よりも育ての母の方が恩が深い、今生の母が分つたと云つて、自分勝手に親子の名乗りをしては、育ての母に濟まないから、身を切られるやうな思ひをして、歸つて來たと話しました。貴女、馨の事は最う思ひ切つたが可いです。」

「文子は、ワツと其の場に泣き伏した。」

折柄稲葉子爵が這入つて来て、

「ヤ、お待たせしましたちや。」

と、不思議さうに二人の様子を眺めた。

文子は涙を押へて、此の場を立ち去つた。

「豫ての御肖像が、漸く出来ましたから持参致しました。」

と、香雨は二面の額を子爵の前に置いた。

「御苦勞ぢやつたね、一つ拜見ませう。」

と、子爵は額面を壁の側の机の上に並べて、暫く眺めて居たが、

「ウム可く出来た。流石は香雨君の筆ぢや、氣に入りました。」

と、事の外の満足であつた。

「時に妙な事を聞くやうぢやが、君は今の女を知つて居るのかね。」

と、子爵は尋ねた。

「ハイ……………鳥渡何でして……………」

「彼の様子ぢや、余程深い關係があるらしいやうぢやないか。」

「ハイ……………實は私の先妻なのですが……………色々事情がありました……………」

「別れたのかね。」

「ハイ。」

「さうかね。いや那麽事を深く立ち入つて聞くにも及ばん……………こりや失敬した。」

と、子爵は苦笑した。

香雨は間もなく辭したのである。

四六 お氣の毒

遊は或る日學校で、

「貴女の處に御厄介になつて居る、あの……………あの方はお變はありませんか。」

と、芳子に尋ねた、あの方とは文子の事である事は分つて居たが、是非お母さんと呼ばせて見たい積りで、

「あの方つて誰……………」

「誰つてほら、貴女の處に居らつしやる女の方よ。」

「女の方……………女中の事なの……………」

「さうぢやないのよ、あの、小母さんよ。」

芳子は根氣負けがして、

「梅村さんも随分強情ね、何故お母さんと仰有らないの……………」

「……………だつて妾、云へないんですもの……………」

「云つたつて宜いぢやないの、お母さんだからお母さんと云ふのに不思議はないことよ。」

「ですけれどね松山さん、義理は辛いものよ。」

「貴女は今のお母さんに、義理を立て過ぎてよ、育ての恩さへ忘れなければ宜いぢやないの。」

「妾、松山さんが美しいわ。」

「何故……………」

「實の御兩親の手で、温い生活をなすつて入らつしやるんですもの……………」

「貴女だつて今のお母さんが眞箇の子のやうに可愛がつて下さるから宜いぢやありませんか。」

「夫れでもね、怎うしても隔てがあるわ。」

「さう、那樣様子は見えないやうですがねえ。」

馨は言葉を改めて、

「あの、母は別に變りなく居りますか。」

芳子は母より文子が奉公に行つた事は、馨に云はぬやうにと口止めをされて居た

けれども此の場合、黙つて居る譯に行かなかつたので、

「あのね、貴女のお母様は最う妾の處に居らつしやらないの。」

「エッ、夫れでは何處へ参りましたの。」

「一月前にね、赤阪の稻葉と云ふ子爵のお邸へ御奉公に行らつてよ。」

「マ、奉公に……、何故御奉公なぞに行らつたのでせうね。」

「怎う云ふ譯か妾は知りませんが、馨と親子の名乗りが出来ない位なら、何時

迄も恚うして居ても仕様がなから、御奉公をされると云つて、行らつたのよ、お

氣の毒だつたわ、毎日貴女の事ばかり云つて居らつてよ。」

馨は兩眼を袂で押へて、

「妾……妾、親不孝ですわねえ。」

と、泣き伏した。

馨は文子が出たと聞いて、堪らなく辛かつた。怎うかして奉公など云ふ

苦境から救つて上げたいと思つた。

馨は學校から歸ると、直ぐに其の話しを香雨にした。

「お父さん、お母さんは今稻葉子爵のお邸に、御奉公なすつて入らつしやるんです

つてね。」

「那麽事を何處で聞いたの。」

「學校でね、松山さんに聞きましたの、御奉公なんぞ爲すつて居らつしやるのは、

定めてお辛い事せう、お父さん、怎うかして救つて上る事は出来ないでせうか。」

「何をして居ても、今更仕方がないぢやないか。」

「だつてお氣の毒ですわ。」

「氣の毒でも仕方がない、今の母さんがお前を幹雄と隔てなく可愛がつて呉れるの

だから、生みの母の事など考へては今の母さんに濟まないぞ。」

咲子は良人に用事があつたので、今香雨の居間へ這入らうとすると、今の母だの、

生みの母だのと云ふ言葉が聞へたので、思はず耳を敬てた。

「妾も今のお母さんの御恩を思へばこそ、松山さんの處で生のお母さんに逢つた時
も、親子の名乗りをしなかつたのですわ。妾、あの時程、辛いく思ひをした事は
ありませんでした。妾は早く御兩親のお許しを頂いて、生のお母さんと名乗りが致
したう御座いますわ。」

咲子は此の時静かに襖を開けて這入つた。

「良人、馨を文子さんに逢はせてお上げなさいまし。」

咲子の聲は潤んで居た。

四七 な さ け

咲子が突然慥う云つたので、香雨も馨も驚きの目を見張つた。

「咲！ お前は今の話しを聞いて居たのか。」

と、香雨は云つた。

「伺ひました。けれども悪氣があつた譯で御座いせんから、何卒お許しを願ひま
す。」

「夫れを悪いと云ふのではない、お前が折角さう云つて呉れるのだが、乃公は怎う
しても逢はせる譯には行かん、また逢はせる必要がないのだ。」

「それは良人、あんまりお氣強ひと申すものです、妻の妾に決して義理は入りませ
んよ。」

香雨は咲子の心を感謝した。けれども咲子が斯う云へば云ふだけ、香雨は怎うし
ても馨を文子に逢はせる事は出来ないと思つた。

「乃公は怎うしても、逢はせる事は出来ないよ。」

「何故で御座います。」

「何故でもよい、最う其の事は云つて呉れるな。」

咲子は何事か心に決心した事があるらしく、

「夫れでは、妾は最う何事も申上げません。」

と、此の話は中止して了つた。

翌日咲子は赤坂の稻葉子爵邸の勝手口を潜つた。

「御免下さいまし、此邸に文子さんと仰有る方が居らつしやる筈ですが、烏渡おに掛かりたう御座います。」

「え、お居でになります、少々お待ち下さいまし。」

と、取次ぎに出た丸顔の女中は奥へ這入つて行つた。

今食事が済んだ處だと見えて、勝手には積れた茶碗だの皿だのが散亂つて居た。

間もなく四十近い、品の宜い女が出て来て、咲子の顔を覗めた。咲子と文子は言

葉こそ交した事はないが、諏訪の珍事の時に立ち合つて、互に其の顔は見知つて居た。

咲子は今出て来た婦人が文子である事を知つた。文子はまた尋ねて来た婦人が咲子である事を知つたが、事更に、

「入らつしやいませ、妾、文で御座います、貴女様は……。」

と斯う尋ねた。

「妾は香雨の家内で、咲子と申します。」

「あ左様で御座いますか、何卒お上り下さいまし。」

と、文子は咲子を一問へ案内した。

文子は何の爲めに咲子が自分を探ねて来たのだらうと不思議に思つた。

互に挨拶が済むと、咲子は、

「あの早速で御座いますが、妾貴女に少々お話しがありましたので伺ひましたので御座

います。」

「左様で御座いましたか、して其のお話しは怎う云ふ事なので御座います。」

「外では御座いません、あの馨の事につきましては御座います。」

「馨のこと……。」

「實は妾も、貴女のお心持ちをお推察致しまして、是非共貴女と馨を公然お逢はせ致したいと思ひまして、良人に話しました處、良人も馨も妾に義理を立まして、承知を致しませんの、子の可愛いのは誰しも同じ事ですから、貴女と馨と親子の名乗りをさせて上げた上、妾も將來貴女と御交際を願ひたいと思ひましたので、態伺ひまして御座います。」

聞いた文子は、咲子の厚い志しを泣いて喜んだのである。

四八名乗合ひ

其の日の午後、文子は香雨の家を訪れ、咲子に逢つた。

「先程は失禮を致しまして御座います。御言葉に甘へまして伺ひまして御座いま

す。」

「まあ宜くお出で下さいました事、何うぞ此方へ……。」

咲子は文子を座敷へ案内して、他意なく待遇し、

「最う直ぐ、馨も學校から歸りませうから、暫くお待ち下さいまし。」

「何うぞ決してお構ひ下さいませんやうに……。」

二人は四方山の話をして居ると、馨が歸つて來た。座敷には客があると見たので、襖越しに、

「お母さん只今……。」

「馨ちゃんお歸りか、仕度を脱つたら直ぐに此處へお出でなさいよ。」

「ハイ……。」

文子は何となく胸が轟いた。

暫くすると襖の外で馨が、